

# 上原三川(一)

——日本俳句運動の地方への伝播の状況

宮坂敏夫

- 一、日本俳句との出会い
- 二、月次十句集における三川
- 三、「新俳句」編輯の内情
- 四、旧派との論争
- 五、教育者としての一面
- 六、新題昆虫俳句
- 七、松声会小史——「はつき木」を中心に
- 八、信濃十句集
- 九、糸瓜忌論争——選者としての三川
- 十、三川俳句論——編年体三川句集
- 十一、三川年譜考

(以上本号)

明治三十七年五月九日付の上原良三郎(号三川)自筆の履歴書がここにある。

前月二十七日に東筑摩郡村立島内尋常高等小学校校長月俸三拾円の職を退職し、明治十七年以來二十年間にわたる教職の一切から身を退くことになる。その際書いた履歴書の下書きであろう。退職事由は、病氣ニ付退職ヲ命ゼラルと書いて抹消し、横に小学校令施行規則第百二十六条第二号前段ニ依り退職となつてゐる。

三川の退職事由の内実がなんであつたのか、ほど推測できるのであるが、<sup>(1)</sup>「病氣ニ付退職」と書かされたのは、三川の生涯にとって、肺結核がまさに宿敵ともいえるものであつたからだ。

履歴書に書かれた病歴だけでも、

明治二十一年(23才)一月六日南安曇郡村立穂高学校訓導兼校長ヲ病氣ニ付依願退職

(翌年三月東筑高等小学校訓導に復職する)

(一) 北里伝染病研究所入院まで

一、日本派俳句との出会い

同二十六年（28才）十月三十一日上伊那高等小学校訓導兼校長ヲ病氣ニ付依願退職

（翌月東筑和田尋常小学校訓導兼和田高等小学校訓導に復職するが旬日あまりで）

同二十六年十二月八日ヨリ翌二十七年一月三十日迄病氣休職

同二十七年（29才）五月四日ヨリ同年九月三十日迄病氣休職

同年九月三十日休職満期ノ為退職

とある。

この二十七年の退職の折に上京し、芝区愛宕下町二丁目北里伝染病研究所に入院する。三十年四月末に帰国するまで、こゝで治療に専念するが、その間に日本俳句との邂逅があったわけである。それはなによりも新聞俳句欄との出会いにはじまる。

「予の居た室は二階の広間で今は能くも覚えて居らぬが儘か六間四方位あったかの様に思ふ。室の南と北とは硝子窓で此窓に沿て寢台が五つ宛並べられてあった。予は足掛四年（満三年）も入院して居て多数の同病者を送迎したのであるが、此永い年月所謂ぶらぶら病のぶらぶらとして新聞や雑誌を読むのが毎日の仕事の様であった。

それに此新聞を読むのが病室内に於る菜みの重なるもので互に交換しては、毎日五六種の新聞は読んだのである。

日本、時事、国民等は最も多く読まれた新聞であった。」（三川「如何なる縁にて新俳句を作り始めたるか」ホトトギス六巻1号）

この同室の新聞仲間「句をやる人」直野碧玲瓏がいた。二十五年上京以来国民新聞の編輯局員だった。そんな係わりで外からの患者も加わって、それらの人達から「造作も無いから仲間になれ」と勧誘され、三川自身も「やって見たい積りで遂仲間入り」（上掲誌）をしてつくり出す。やがて運座をしたり、募集俳句に応じたりした「月並俳句」詠草を老風堂永機や其角堂機一などの宗匠に添削を乞うた。三川の俳句への関心は仲間誘われたことが、まず直接の動機であったようだ。

だが、俳句への内面的な関心がつくられてきた、かすかな要因が、他にもう一つあったとみたい。

#### （二） 矢ヶ崎奇峰の存在

「ホトトギス」の文章で、三川が「やって見たい積りで遂仲間入り」をしたと記していることは、三川自身、それまでになんらかの俳句への関心があったことになるであろう。その関心をそそるきっかけはどこにあったのかと考えるに、私は、同郷の矢ヶ崎奇峰の存在があったのではないかと思う。

奇峰は明治三年生まれで、三川よりも五才年下であったが、俳句入門は先んじていた。

「奇峰文集」（昭和七年二月十五日刊）の年譜によると、

明治二十七年二月、新聞「小日本」の創刊せらるゝや、同紙上に俳句を寄す。此頃より俳句に興味を有す。馬の背に陽炎立つや田舎道(作句の初)

同年四月、東筑摩郡和田組合高等小学校に転任。上原三川君と識る。

同年十月より正岡子規氏と文通。

二十八年四月、上京子規庵を訪ふ。偶々同氏從軍中にて、母堂の紹介により、内藤鳴雪氏を真砂町の老梅居に訪ひ、河東碧梧桐氏と三人にて句作をなす。爾來鳴雪翁の死に至る迄交りを紹介ぐ。東京、大磯に十日間滞在。東海道を経て伊勢、京都、奈良、吉野、大阪等を二巡して帰る。三十五日間旅行中の俳句を「日本」紙上に送る。

二十九年四月、上京滞在一ヶ月、此間子規庵に出入す。同人のしばしば集るもの、鳴雪、虚子、碧梧桐、紅緑、飄亭、肋骨、酒竹、把栗、牛伴、爛腸等。

二十七年四月、和田高等小学校へ転任した時の首席訓導が三川であった。奇峰は、町立松本小学校から郷里へ帰ってきたのである。

先に病歴を掲げた通り、奇峰が和田へ移る年は、三川の北里へ入院加療をする年にあたり、ほとんど学校に出ることができなかった。四月に奇峰を迎えるが、五月四日にはすでに休職、そのまゝ退職し、上京、入院となる。

奇峰が「小日本」に投句した初出は、三月二日「牛の背に陽炎立つや田舎道」の一句で、(年譜中の「馬の背に」は誤謬)以下、七月十五日の「小日本」終刊までに、十三句「文苑」欄に載る。

三川と奇峰は、たしかにこの時期に出会っているが、奇峰によると「宿直室で一寸顔を合せたのみで、殆んど君とは交りがなかった」と言う。俳句に關することがらを話すということもなかったわけである。三川の方に格別俳句への内的な係わりができていなかったのだ。しかし、全くなかったとはいえない。長野師範を出て、いまだ二年、潑刺とした清新な文学青年教師の志向に、三川がどれほどか興味をもったことはあり得たであろう。こゝに三川のきわめて飄気であるが、俳句への関心がつくられる遠因をみたいのである。

三川が同室の新聞仲間(運座を誘われたときに、「やってみたく積りで遂仲間入り」をした。その時に、かつての同僚奇峰のことが一瞬脳裡をよぎったかもしれない。

三川にとり奇峰は、俳句の師ではなくとも、かすかな導火線となつたひとりともみたい。

因に、奇峰の「日本」への投句をみると、二十八年は一月六日から十月十三日まで十句、二十九年は十五句、掲載されている。奇峰の他には、後に三川から「信中新派の俳句を善くする人」(句さ<sup>(4)</sup>「上、長野新聞、明治35・12・3」)の一人に取りあげられる飯島八千溪<sup>(5)</sup>が、すでに

河骨や老僧慰みに鯉を飼ふ

29・7・13

屋顔や其余の草は枯れんとす  
以下二十九年中に七句選ばれている。

29・7・24

(三) 「俳句界近時の形勢」

月並であれ、新派であれ、句をやりだす上で、新聞や雑誌との係わりは見逃すことができない。

最も斬新な子規選の日本派俳句が第一面に載る日本新聞に、三川がいつ頃から注目するようになったか。そして何時日本派の句を詠み出したのか、この点に関して考える前に、三川ら北里の入院仲間がよく読まれた新聞「日本、時事、国民」などの俳句欄の状況について、みておきたい。二十八、九年頃の俳句界と、それら新聞俳句欄の連携が、きわめて密接だからである。

「新俳句が明治文壇に向って鮮明なる旗幟を繙へしたるは日本及び小日本紙上に本陣を据えたる子規等を以て始めとす可きか、之に次ぐを毎日新聞と為す、余は実に、此の二三新聞を以て明治俳句の先導者とするに憚らざるなり」

と、白雲（五百木飄亭）が「日本」へ「俳句界近時の形勢」を五回にわたり書いたのが二十九年五月六日から十二日にかけてである。白雲の記事により、当時の新聞、雑誌における俳句の取り上げ方をみたい。

二十八年十月、毎日新聞に岡野知十が「俳諧風聞記」を出すや

「漸く勃興せんとせし俳句の気運は此導火によりて俄然爆發し、形勢頓に一変して茲に俳句流行の声を伝へ初めぬ」と言うことになり、都下の新聞、雑誌が時勢に駆られて、詠草や俳論の類を掲げ出す。二十九年に至り俳句流行の声はいよいよ高くなる。昨年の秋声会につづき、大学派、雪人派などのグループが結成され、子規派とともに、文壇に「地歩を占める者」となった。

新聞では、俳句を「嘗て嘲笑を以て遇せし国民の如きすら尚之を掲げ、時事、東京日々の如きも皆此の潮勢に巻きこまれ、甚だしきは、中外商業新報にすら此新文学を見るに至りしも亦本年の事なり。」と言う。

雑誌では、「早稲田文学、めさまし草、太陽等の新たに之を迎ふるあり、今日に至りては都下に有名なる文学雑誌にして巻中俳句の散在せざる者殆んど之れ無きを見る、豈又盛ならずや」と書いている。

概観すると、「風聞記」のブーム以前を新俳句発達の第一期、二十八年後半期のブームの時が第二期、勃興期、そして二十九年を「新俳句が全く文学的として世間に確立したるの時」となる。

都下の十六新聞紙中、十新聞、

日本・毎日・読売・東京日日・時事・国民・東京・自由・中外商業・報知

が、俳句を掲載しているが、「所載の俳句を吟味し、その俳句の価値上より厳格に之を検し去れば」、日本・毎日・読売の三新聞を除

く大半は「非文学的なる月並的俳句」だと言う。

また明治新俳壇勢力を組織者の階層からみて、五つに大別している。

一、日本派・此派の勢力は専ら読書社会にある。代表俳人は鳴雪、子規、虚子、碧梧桐等。

一、秋声会派(毎日派)・組織、流派上、内部で三派に分れる。

。毎日派・毎日新聞による。読書社会に勢力のある点、日本派と近似。洒竹、正味、残花等。

。竹冷派・法律家社会に勢力がある。毎日派より程度少し下り、三分の月並調をもつ。

。読売派・読売新聞による。別に硯友派とも。小説愛読者に勢力がある。紅葉、眉山、漣、鏡花等。

一、大学派・作家よりは論客グループ。嶺雲、洒竹、醒雪、悠々、臨風等。

一、雪人派・阿心庵永機の後嗣ぎ宗匠で、月並社会に勢力がある。一、雑派又は新月並派(以上の四派に入らない者)・僅に旧月並の水平線上に頭をもち上げた位の者。多くは幹雄門下で秋声会に加わる者もいる。

以上の状況を略示すると(傍点宮坂)

日本派 日本、日本人、めさまし草、太陽、早稲田文学

秋声派 毎日、読売、女学雑誌、文学界

大学派 帝国文学、青年文、明治評論

雪人派 東京日日、時事新報

雑派 国民、東京、自由、文芸倶楽部

三川らが熱心に目を通した三紙、日本・時事・国民は、日本の外は、旧派からの投句が俳句欄をうめていたわけで、三川が国民新聞に関係していた碧玲瓏らに誘われ、月並俳句をものし、永機や機一に見てもらったと言うのも、療養の間のしぜんのならゆきであったと想像される。

#### (四) 「日本派の様な」

同じ新聞と言っても、読書社会(教員層が中核)に主に読まれていた新聞日本の俳句などは、時事新報や国民新聞の旧派の俳句を見慣れた者の眼には、なかなか馴染めなかったらしい。

これはわずかな資料からの推測であるが、子規閔、三川・碧玲瓏共編の「新俳句」が上梓される四か月前に出された近藤泥牛編纂の「新派俳家句集」(30・11・15日刊、発兌元、白鷗社)をみると、秋声会作例として、三川の「畠打つ十歩に養る鴨哉」の一句が、紅葉や小波、竹冷、洒竹、四丁などの句と一緒に出されている。これは「新俳句」にも取められる句であり、三十年春の作である。三川の句が根岸会や子規派の地方句会の項に出ないで、秋声会の一句として取

り上げられたことは、三川がときに、毎日新聞などに投句をしたか、又は角田竹冷あたりに句を見てもらったことがあったのであろう。

しかし、いったん、子規派の新俳句に関心がむくと、そこには、明治の新社会の風俗思想が大胆に取り入れられている魅力があり、ひかれるのだった。先述した「ホトトギス」の一文はひきつゞき、こう書かれている。

「偕仲間入りをしてからは新聞を読むにも先づ俳句欄を見る、それも注意して読むといふ風になって、何時しか三月半年と立つ内に日本新聞の句も追々と解って来て、所謂宗匠等の句とは全く違って居ることを覚った。其処で自分もどうか日本派の様なものを作って見たいと思ふ様になった。」

宗匠連に添削を受けた句がどんなものか、今となつては見出すことは、まず不可能だろうが、三川がはじめて「日本派の様なもの」を公にしたのは、二十九年九月八日、新聞「日本」子規選に載る

隣から来てぶらさがる糸瓜かな  
三川  
の一句である。ひきつゞき「日本」へは、二十九年七句、三十年八月掲載されている。

衣洗ふ盥に桐の一片かな

29・9・14

朝夕は残る暑さもなかりけり

9・27

ごろごろと日向晒しの西瓜かな

10・8

水洒れて古井の底に鳴く竈馬いんど

11・3

渋柿の垂れけり手のとどくところ

11・12

濠端の片側町や枯柳

12・6

木兔を梟の子と申す愚なるかな

12・10

かんてらや古尼袋販ぐ道のはた

30・1・7

夕陽に小坊主急ぐ枯野かな

1・18

蓮枯れて弁天堂の淋しさよ

2・16

苔清水草鞋ひたして別れけり

6・5

小柄杓で女水打つ戸口かな

6・5

熟したるいちご嬉しき山路哉

6・17

竹植ゑて心に適す小庭かな

6・17

道ばたや一膳飯の夏柳

6・28

このうち、「苔清水」、「小柄杓」の二句は、後述する月次十句集で作句年代が二十九年十月、十一月と判っている。八か月前に作句し、投句したものを、季語と「日本」への発表月日を考慮して、子規は翌年の夏に掲載しているのである。当時の作句法は題詠が主であり、ときには、字結びを子規派でも用いているので、かならずしも季語によって、発表月日に近い頃の作と決めることもできない。それに、「日本」へは、少なくとも一月程の間隔をおいて掲載したようである。そんな点を考え合わせるならば、当季を詠んだとしても、「日本」への初投句は、二十九年夏の頃と推定していいであらう。

当然作句はそれ以前にしていたことになる。それに掲載は、子規の言によれば、厳選であったようだ。新人が載るには、なんらかの子規の指導、添削が、投句以前にあったことも考えられないことではない。

三川が子規と会ったのは、いつ頃なのか。

「碧玲瓏、春風庵、竹采庵、東洋四氏は同時の同病者で、東洋氏は同国、他の三氏は同室であったが、四氏は直に新派へ踏み込んだので、其進歩も著しくあった。」(ホトトギス上掲)

右の文によると、三川は碧玲瓏以下の四氏より一步遅れて新派へ入ったようである。

「明治二十九年の俳句界」(『日本』30・1・2～3・21)という子規の俳論形成上ひとつのエポックとなる長い論文の最後に、二十九年に活躍した三十八人をあげて二字評を下している。その中で、碧玲瓏は広惺と評されて出ており、三川はあがっていないところを見ると、碧玲瓏はすでに日本派の俳人としてある程度知られていたことがわかる。しかし、実際碧玲瓏が子規と会ったのは、後に「新俳句」編纂中のことで、「病牀手記」三十年に「十一月二十一日曇、直野碧玲瓏始メテ来ル」とある。すると、碧玲瓏は、二十八、九年の頃、句を通しての外は、子規とそんなに親密な間柄というわけではなかったようだ。

同室の俳句上の先輩碧玲瓏が、子規とこのような風交をとっていたことは、三川の行動にもなんらかの影響を与えたであろう。

俳句を寄せて添削を乞うことは、あるいは二十八年中にあったかも知れないが、子規と面談するというのは二十九年に入ってからはなかったろうか。

二十八年には、三月三日から十月末まで、子規は従軍のため東京に居らず、同郷の奇峰が留守を訪ね、実際に会うのは、二十九年四月であったことは、先述した通りである。三川が子規と会うのも、この前後ではなかったか。<sup>(8)</sup>

だが、碧玲瓏と同様に、三川も日本派へ一途にうち込んでいったもようである。後述する二十九年四月よりはじめた子規の俳句鍛錬会、月次十句集のメンバーに、その年の十一月から加わっている。ずぶの新人を、碧梧桐、虚子、鳴雪、墨水、肋骨といった直門の鍛錬会に加え、幹事役を命ずるはずもなく、ある程度、それ以前に、これらの俳人との交流があり、子規にも、その作品が認められていたことを思わせる。

「印象の明瞭なる句を作らんと欲せば、高尚なる理想と茫漠たる大観とを避け、成るべく客観中の小景を取りて材料となさざるべからざる」と碧梧桐の句を掲げて、子規が当時の特徴を説いている。

三川の句は、碧梧桐ほどの「絵画的」な印象明瞭さはないが、初出の糸瓜の句をはじめ、「客観中の小景」を材料として、簡単に印象明瞭な句を作ろうとしている点は(朝夕の句、木兎の句、蓮枯れての句など数句は別の趣きだが)、ほぼ共通しているところである。

しかし、蕪村派と呼称される子規一門のシンボルマークともいっ

てよい漢文漢詩調がいがいにくい点を指摘しておいてよいであろう。「夕陽せきやうに」とか「水洒れて」、「竹植たけうゑゑて」といった句にないわけではないが、「漢語に偏す」句は一句もない。これは、たとえば、奇峰が「小日本」へ登場した頃の、

鐘一杵千金の春暮れて行く

27・5・1

山寺や落花を掃ふ僧一人

5・10

寂寥の中に花ちる野寺かな

肥馬軽裘暮れ行く春を送りけり

5・22

五月雨や瀬多の長橋夕日さす

6・18

といった漢詩文や古典べったりの句の傾向とも違う。二十八、九年の当時「日本」に出した、奇峰の次のような漢文漢詩調や物語風の句の方が、一般には新味を持った句として支持されていたが、子規はすでに流行に偏したところがあると見ていた。

神馬嘶て若葉の山静なり

28・6・10

時鳥太閤様の墓所かな

6・25

青嵐雲吹はらひ吹はらひ

7・6

風かをる中から出たり海の月

29・7・24

天の川黄河の水流れて東す

9・14

水落ちて石出でて後の月夜かな

10・28

これに対して、三川の句は、観念的でなく実景実情という現実の素材から発想し、できるだけありのままに表現しようとする地味な点に特色がある。それだけに、「一花一鳥の簡単なる事物は尋常にして無味を免れず、同じく写生なりとも今少し珍しき事物、複雑なる事物を写すべし。」(『日本』30・1・6)との思いはするわけで、いかにして「無味」でなく「印象明瞭」な、余情のある句にするかが問題となるのであった。

これは、子規が夙に求めている「句は実景実情を有の儘に言ひ放しながら、猶其の間に一種の雅味を有する」(『頼祭書屋俳話』31)という難しい域に、はからずも、句作の初期から三川は直面していたとも言そうである。

## 二、月次十句集における三川

### (一) はじめに

近年刊行された「明治俳壇埋蔵資料」(麻野恵三編著、上野洋三校訂)は、碧梧桐関係の資料をもとに編まれた貴重な俳書である。同書所収「月次十句集課題」(一題十句)一覽の、二十九年から三十二年までを検討してみると、三川の日本派へ参加した初期の様相がかなり明らかになるのである。





歌	9	3	子規
星	10	紫人	碧梧桐
菊	11	一五坊	三子
紙	12	三子	格堂

この一覧は子規の筆蹟で三十三年十二月まで明らかになっており、さらに碧梧桐がひきつぎ、三十五年十月まで記録している。

## (二) 一題十句の試み

この一題十句とはどんな試みなのか、虚子の「雑筆」(ほととぎす(二巻6号)中の一文を手がかりに触れてみる。

一題十句の流行し始めは、子規が蕪村の「新花摘」を見て、欣喜雀躍、模倣したものである。「新花摘」は一日に、一題の下に十句程度の句を日記風に収めてある句集であるが、子規は我も劣らじと「牡丹十句」を作ったのはじまりで、それ以来、一題十句がはやり出し、句会の席でも連座一回おわると、後に、一題十句を行なうのが例になった。それは、従来の一題一句として数題作る連座では、限られた時間内に次から次へと異なる題をこなさなければならぬので、十分に想像力を駆使する余裕がなかった。それが一題十句となると、「一物の趣味を十の方面より見るなり、一皿の肉を十度味ふなり」ということになり、最初、浅薄で未熟、平凡な着想も、四句五句と詠みすすむうちに一題を深く新鮮に解するようになる。

り、十句近くなると、想像尽し、言い尽して、ことばが自在にはたらく境にまでとどくようになる。虚子の表現をかりると、「座右にある古人の句などを散見しつつ、ふと某といふ語に逢著して忽ち又一新境を開き、茫々たる原野際涯なきが如く、二三句はもとより五句七句更に立所に成るが如きを覚えん。」ということになる。

このようにして得られた十句は、十回の連座によって得た十句よりも、変化も活動もあるものになるわけで、「その題の趣味」が深く印象づけられて他日の句作をきわめて容易にする。

虚子はさらに、一題十句の題は、季語を用いるがよく、天然よりも人事の方が変化が多くて想像力をはたらかすによい。また珍しい季語を出して、「十句悉く斬新、古人の知らざる趣味」をさぐり出すもおもしろいと述べている。

以上のようにして生まれた一題十句の試みを、私は、子規の俳句鍛錬の新しい方法として注目したのである。

子規が、いままで用いてきた作句方法で、格別目立つものは、三つあった。

明治二十五年一月三十日、竹村、新海、五百木、子規の四人で、題を出してなるべく早く早く句をつくる練習、いわば俳句の競争「せり吟」。この「せり吟」はのちに、一題百句の競吟として、しばしばおこなわれることになる。

また、ほぼ同じ頃ははじめた「何々十二ヶ月」形式の句作り。たとえば、「燈火十二ヶ月」「風十二ヶ月」「煙草十二ヶ月」「男女句

合十二ヶ月」「根岸十二ヶ月」「去来調十二ヶ月」「蕪村風十二ヶ月」といった十二ヶ月シリーズ。

さらに「せり吟」とは異なる独詠で、百句の試み（「雲百句」28・7）。それに俳諧「独吟百韻」（28・12）とかいくつかの歌仙など。

こういった試みの中で、一題十句は、子規がたまたま蕪村から暗示された方法ではあるが、子規の試みとして、門下の俳人にたちまち拡がり、日本派の一つの作句鍛錬法として定着するのである。

後に三川は、子規から学んだこの方法で、「信濃十句集」（又ははつき木十句集）を明治三十七年六月から三十八年七月まで十四回にわたって行ない、鍛錬をしている。この鍛錬が松声会をもちあげ「はつき木」を出す根底になったわけである。私は三川の活動のもっとも重要なものとして考えているので、いづれ節を改めて詳述したい。ここでは、その課題と実施された年月だけを紹介するにとどめる。

信濃十句集課題一覧

回数	課題	投句メ切年月日	出詠者数
第一回	雲	明治37年6月10日	10人
二	朝夕	7月10日	10人
三	色彩	8月10日	10人
四	時（秋季結）	9月10日	（10人か）

五	人倫	10月10日	9人
六	草枯	11月10日	12人
七	天地人	12月10日	8人
八	新年	1月5日	9人
九	女（春季結）	2月10日	9人
十	畑打	3月10日	10人
十一	幼少（春季結）	4月10日	7人
十二	食物	5月20日	8人
十三	祭	6月25日	8人
十四	肢体	7月10日	9人

さて、十句集は、子規の発案で、二十九年四月から始まり、子規みずから課題と幹事を決めた。投句者はその幹事のもとへ当月の決まった日までに十句を送付する。幹事はそれらの句を混ぜて清記し、廻覧順序を書いて、出詠者にわたす。清記稿を受けとった出詠者は、例えば、次のような凡例にしたがって選句するのである。

ここでは三十一年四月、梅沢墨水が幹事役を勤めた「遊廓十句集」の例を示してみよう。

凡例

一本句集出詠者拾六人 総句数百六拾句 依テ此内拾六句ヲ撰、  
 天地人ヲ附スル事

一本句集留置キハ一人廿四時間ヲ限リトシ廻尾ヨリ幹事へ返付  
シ、拔萃ノ句ハ四拾八時間内ニ幹事迄送付スルモノトス

一次回課題

◎◎◎◎  
◎◎◎◎  
◎◎◎◎  
◎◎◎◎

裁判十句 訴訟・公事・控訴・上告・拷問・訊問・宣告・法廷・

裁判所・裁判官・判検事・弁護人・原告・被告・法律・刑法等

五月十五日迄ニ送付ノ事

下総国千葉町大字本町

幹事 渡辺助治郎(香墨)

一次々回課題

雲十句 六月十二日迄

神田淡路町一丁目一番地高田や方

幹事 加藤寛一(胡堂)

右ノ通り

月 日 遊廊十句取締 墨水

このような方法である。一日とか二日とか日数で言うのではなく、時間単位で催促をしているところなどいかにも潑刺とした感じを受ける。

幹事は送付された句稿を整理し、「得点細見」表(誰が誰の句をどのように選んだか)を作り、得点と順位を出す。そして、一巡した句稿に、作者名を下に記し、選句者名を句頭に入れる。句稿末の余白に高点评やその回の選句傾向をまとめる。こうして、もう一度

出句者全員に回覧するのである。

こゝで問題となるのは、出句者をどのように限るかということであるが、この点に関しては、かなり気を遣っている。「ほととぎす」二巻7号、東京俳句界「小十句集」互選結果の後に

「近時市内居住の人にて新に十句集に出句する人多きは喜ぶべき事なれど、中には一面の識も無く一片の書信の往復だに無き人少からず、たみに出句者相互の感情融和せず、或は不快を起さしむるの憂あり。此等の人は時々俳句会に出席する事、又は其他の法に於いて交際の道を開かれんことを望む。」

とあり、さらに後には、出句者を制限して、

一、東京市内在住者

一、かつて東京に在住して地方へ移った者

一、その地方在住者と同一地の者

としたことが知られる。これは、子規がこの十句の集りを、根岸草廬の月例会とはまた違った観点から考えていたことがわかる。

子規庵での月例の運座が、いわば子規直門の毎月の顔見世であり挨拶の場としての様相をもつものならば、こちらの方は、先述の虚子の言にもある通り、じっくりと想を練り、句をまとめる、孤に徹する機会と考えたのではないか。

そこで子規は、腰部の疼痛がひどく重態に陥る(三十年五月下旬)ような、たびたびの瀕死の状況にありながら、三十一年十一月までに、みずから三回も幹事を引き受けている。出句者は少ない時で十

人、平均すると十三人であるが、後にはたびたび二十人を越えるときも出るようになる。

子規が直接関係したと思われる三十三年末までの幹事の顔触れで、二回以上幹事を勤めた者を掲げると、その当時、子規派の在京の主要なメンバーがほぼ含まれているといえよう。

三回 子規・碧梧桐・虚子

二回 把栗・墨水・肋骨・愚哉・繞石・三川・楽天・春風庵・香

墨・鳴雪

(。点は宮坂)

三川・楽天・春風庵、それに一回幹事をつとめる碧玲瓏と東洋を加えると、これが、北里伝染病研究所入院患者を中心とした三川グループ(もっとも楽天は外部から北里へ出入した者)ということになる。三十二年当時「ほととぎす」同人でない者は愚哉の他には三川グループのメンバーだけである。三川らは子規派の主要メンバーというわけではなく、むしろ、非常な熱心さで日本派俳句に心酔していった新進俳人というべきである。

子規は俳句や俳論の上で、自身次々に新しさを追求したばかりでなく、子規派のグループ形成、組織化にあっても、つねに新人の育成に特別の配慮をもっていた。これは、かならずしも子規ひとりの特徴ではなく、グループのリーダーとなつて「座」を動かす者は、組織者として新人発掘、鍛錬に特異な才能を発揮してきたわけである。が、三川らが、二十九年から三十二年という子規の「死はますます近づきぬ、文学はやうやく佳境に入」<sup>(10)</sup>った、もっとも重要な転

機に、秀技として格別注目されたことは、三川の句業を考察する上で、留意したところである。

まもなく三川がこのグループの協力のもとに「新俳句」を刊行することも、月次十句集の鍛錬をぬきにしては考えられないと、私は思う。

### (三) 子規書簡中の十句集記述

子規の生涯で、十句集という形で、五年間も力をこめて自ら一投句者となり切磋琢磨したという事例は他にはない。子規がこの月次十句集に、いかに意欲を炎やしたか、その点を、角度を変えて子規書簡から検討してみたい。

(1) 碧梧桐・虚子の連名へ宛てた二十九年三月三日の手紙に、次の一節が出てゐる。これが十句集のはじまりを示すものである。

「烟十句は一人一日として早くまはすやうにしたまへ。余り遅くなりて張合ぬけておもしろからず。」

意気込んでゐる病床の子規からみたら、両人の取っ掛りはいかにも悠長にみえたのである。

(2) 二十九年八月十八日、虚子宛

「毎月宿題の分は今度寺十句に御座候。山門、伽藍、庫裏などの建築物皆よろしく候。来月十日迄に小生へ御送被成下度候。

鴉十句は碧梧桐高点、次は小生、次は墨水、次は貴兄に候。嵐十

句は錦浦高点、次は把栗なり、貴兄は七番、小生は十三番に有之候。御入用ならば吟巻御送附可申候。」

一旦は自分の後継者と目した虚子が、なかなか俳句に腰が据わらなかつたので、火付けに躍起となつて子規の善意が彷彿とする手紙である。寺十句の詠み方の注意や鴉十句、嵐十句の得点順位の通報、さらに望むなら句稿を送付してもよいという知悉の配慮がよく伺える。「宿題」の語が重い響きをもっている。

(3) 三十年三月八日、これも虚子宛。

子規は三川の発起による「新俳句」出版の件に触れて書き、さらに三川が幹事にあたる翌四月の十句集について付記している。すこし長いが三川と子規との係わりを見る上で重要な手紙なので取り上げたい。

「一昨日拙宅俳会。鳴雪翁は「娘嫁期近づきたり」とて来られず。三川来り候。三川の発起にて（日本）の俳句等を出版せん（民友社より）との事、小生も賛成致候。冬の部だけ先づ版にせんとて小生只今校閲中なり。」

此中へ冬帽、手袋、やきいも、毛布、襟巻、冬服、ストローヴ等の新題を季の物と定めて入れんとす。貴兄も此題にて御つくり被下度御送附願上候。尤も最初の事故之を季に入れたりと見するには他の季を結ばぬ方よろしと存候。（中略）

やかな十句集の次は心十句なり。心の文字結なり。幹事は芝愛宕下町二丁目北里研究所内上原三川なり。飯十句は改めて募集せ

り。小生書くつもり。」

この手紙には、子規が「新俳句」出版になみなみならぬ意欲を示しているのがわかる。「新俳句」出版の件が一昨日（三月六日）、俳席の場で直ちに決まったとは受けとれないが、正式に三川から子規に話を通じ、快諾を得たこと。それに明治新題を詠んだ句を収録すること、そこにこの類題句集の特色をもたせたいという、画期的な仕事を企する子規らしい思いがみえる。

三川の名は子規と虚子との間で、なにも拘泥することのない、むしろ一目置いている人物として見られていることを示しているのではないか。しかし、この文面を書いた子規の心中は、かならずしも穏やかではなかつた。もし、自分たち日本派の句集を編むのなら、当然、虚子が碧梧桐が、その仕事を担うはずだ、引き受けねばならないという、子規には暗黙の決意のようなものがあつたかと思う。

二十八年十二月の道灌山での虚子との会談で、文学の後事を托すことを断わられて以来、己にたよる外なしと子規の気持は必死であり、また塞いでいくばかりであつたが、そうは思つても、虚子のことは格別心にかかるのであつた。

「近来に至り貴兄の御心底はわれらには全く相分り不申」とか「兄御帰京已来少しも尻が落ちつかぬやうに見受申候」「近来碧生の尻の落付は貴兄よりもよろし、さは思ひたまはずや」（29年6月3日付虚子宛）と、しきりに鼓舞するといふよりも、子規が泣訴しているような書簡がある。

一方、碧梧桐は、碧梧桐で、虚子と同様に、子規の気持とは異なり、いささか楽天的であった。

「子規の回想」統編第五章で「新俳句」誕生の頃をこう書いている。

「我々の句集がもう出てもう頃、誰しもがそんな気分を持ってゐた。廿八年神戸病院でも子規からの話があったので、「日本の俳句欄を切りばりすれば、十日か廿日の労力で済むやうに思つてゐた私は、子規から神業だなどと笑はれて手をつける元氣もなくなつてしまつた。」

このような虚子や碧梧桐であつてみれば、子規が虚子宛書簡で、新人三川が、兩人が手もつけなかつた、日本派の嚆矢となる句集を上木することになった由をこまかに報じ、さらに十句集次回幹事も三川だと、文中二か所にわたり三川の名をあげていることは、三川をかりて虚子への揶揄や皮肉ではなくとも、怠惰を戒めるに似た気持があつたと思われる。それほど三川は炎えていたのである。

#### (四) 「承露盤」と十句集との関係

ところで、このような気合の入つた子規の十句集に、三川がいつ頃から加わるのか推測すると、二十九年十月「はきもの」十句集から、三十三年三月「芝居」十句集までであると思われる。

その根拠を示すと、こゝに昭和十二年、子規三十六回忌にあつ

り、子規文庫に遺存していた「承露盤」(原本は、明治廿八、廿九、卅年が一冊、卅一、卅二、卅三年が一冊、合わせて草稿二冊)が寒川風骨により上梓された。

「承露盤」とは、二十八年から三十三年まで子規の手元へ送られてきた各俳人からの句を書きとめておいた手控集で、年代別、四季別に書かれている。この中から、順次新聞「日本」文苑欄や「ホトトギス」へ載せたり、また既発表句を添削して書きとめたりして、いつか日本派の句集を編む時にでも資料にしようと思つておいたものである。

この「承露盤」を分析すると、二十九年四月から三十三年までの十句集で、子規選に入つたものを中心に、子規が秀句だと目を留めた句が収録されていることが推定される。

そこで、三川の句についてみると、

「承露盤」収録66句のうち、

月次十句集関係(推定)

「新俳句」へ入れる

「春夏秋冬」春の部へ入れる

となつてゐる。十句集の句の中で、9句は「新俳句」へ収録されている。

では、日本派俳句の試作として、「承露盤」66句中から推定した月次十句集の句を掲げたい。なお月次十句集の結果は、「ほととぎす」が発刊されると、東京俳句界の句会稿として例会記録と同一欄

38句

23句

3句

に出されるようになる。こゝをみると、かならずしも子規選には入らないが高点句は出されている。「承露盤」中の推定句と合わせて次に示す。三川の初期の句風を知る大切な資料となるものである。新||新俳句、新派||新派俳家句集、日本||新聞日本に、それぞれ出ていることを示す。

「はきもの」(明治29年10月)

苔清水草鞋ひたして別れけり

新・日本

「女」(29・11)

小柄杓で女水打つ戸口哉

新・新派・日本

「飯」(29・12)

粟飯のめんつう寒し川普請

松涼し巡礼親子飯をくふ  
道ばたや一膳めしの夏柳

新・日本

「字余り」(30・2)

藁屋四五軒まばらに梅の月夜哉

「やかな十七字句」(30・3)

取り残す菌小き恨かな

押しあふて蝨ふんばる袋哉

熟したるいちご嬉しき山路哉

「心」(30・4)

竹植て心に適す小庭哉

日本

朝露の踏心よき芝生哉

「杉」(30・9)

芽美しく杉の籬に雨晴れぬ

尼寺の杉垣低き紫苑哉

「道路」(30・10)

畑打の道を隔てて話かな

家二軒道を挟んで佔うつ

凍てし道を屑ひろひ行老爺哉

「船」(30・11)

両国の花火開くや舟の上

「卜筮」(30・12)

山寺に御鬮をさくる彼岸哉

移徙や吉き日を卜す小六月

辻占や揚屋の炬燵夜更けたる

辻占や按摩の声や冬の月

「炭」(31・1)

炭屑の起りかてにして消易き

鮑屑を入れる炭の俵かな

けし炭や火を吹起す火吹竹

「馬」(31・3)

畦道や蝨飛びつく馬の顔

蟻螂の馬に踏まれし最期哉

新 新

新



「雲」(31・6)

行秋の雲ちぎれ飛夕哉

竜躍り虎うつくまる雲の峰

「洋語」(31・10)

北風や雪ふきつけるガラス窓

ペンキ塗の家新しき若葉哉

「草」(31・11)

破垣や鬼灯熟す草の中

「子」(31・12)

菖蒲湯にこみ合ふ人や赤子なく

「絵画」(32・1)

大仏を写生してゐる桜哉

お祭の狂画をかきし行燈哉

「小」(32・2)

蟻螂の小癩に障る素振哉

入海に臨む小春の二階哉

「垣」(32・5)

石垣に葛這ひさがる御濠かな

「かぶり物」(32・8)

夏帽の四五人つれや語り行

「菊」(32・11)

寒菊の久しく咲かぬ蕾かな

「紙」(32・12)

鼻紙を探る夜寒の袂哉

「白」(33・1)

押し合うてせり出されたる目白哉

美しき籠にさへづる目白哉

「芝居」(33・3)

看板を見て通りけり初芝居

出来秋の日和続きや村芝居

この一覧で、中途とんでいる月は、

○三川が出句しなかった

○出句したが子規選に入らなかったので「承露盤」に控えられなかった

○出句したが、子規選にも入らず、かつ高点句がなく「ほととぎす」東京俳句界にも出なかった

以上の三通りが考えられる。多分、そのほとんどは、三川自身出句しなかったものと思われる。

この月次十句集の句稿は、その時の高点者に譲渡されたもので、三川が高点となった、三十一年三月「馬」十句などは、当時三川のもとにあったものであるが、数次にわたる転居と火災により、なくなってしまう見ることができない。

現在完全な形で残存しているのは、先の埋蔵資料に収録されてい

る、碧梧桐の手元にあったという三編、烏十句(29・6)、船十句(30・11)、遊廓十句(31・4)で、そのうち、三川の投句や選句に関する事情が判るのは、船十句である。

次にそれを検討したい。

船十句集(30・11)は、竹村修(秋竹)が幹事となり出句者は十二名(後から吉野左衛門が追加して十三名となったが、回覧されたものは、十二名)。船という無季なので、季を入れて詠む。季に分けると、春25句、夏28句、秋47句、冬20句  
あわせて百二十句。よって各人十二句を選抜。

出句者の十二名中、三川以外はみな在京者なのが注目される。

- 正岡 子規(下谷区上根岸町)
- 下村 牛伴(神田区五軒町)
- 河東碧梧桐(神田区淡路町)
- 佐藤 肋骨(麹町区上六番町)
- 大谷 繞石(本郷区森川町)
- 中村 楽天(芝区南佐久間町)
- 弘光春風庵(芝区愛宕町伝染病研究所内)
- 直野碧玲瓏(同)
- 山本 東洋(同)
- 上原 三川(信濃国東筑嶋内村川船君十方)
- 竹村 秋竹(本郷区森川町)

栗田 木岡(同)

三川の句は、次の通り。句頭の一字は、選者の号一字である。

繞・木

万歳の猿曳と逢ふ渡し舟  
風船に結びつけたる吉書哉

秋・楽・碧・牛(天)

二三人小船漕ぎ居る裸かな  
店先や胡瓜のせたる菓の船

肋

軍艦に天子行幸し玉ふ秋

東

初汐に乗りて小き帆船哉  
秋の空風船高くあがりけり

笹舟に乗りて盪の蝨かな

繞・規

両国の花火開くや舟の上  
北馬南船ことしも暮れて仕舞けり

三川十句の趣向が、どんなところにあるか大別すると、

。漢詩、漢語趣味や懐古風の句

。万歳の、風船に、北馬南船、軍艦に

。写生、写実を心掛けた句

。二三人、店先や、初汐に、秋の空、笹舟に、両国の

となるであろう。このうち、

二三人小船漕ぎ居る裸かな  
両国の花火開くや舟の上

の二句が注目される。前者は牛伴の天となった他、碧梧桐、楽天、秋竹に採られている。後者は繞石、子規に抜かれた。両句とも、所謂印象明瞭な写生を目指した句で、船という題詠でありながら写実味を出している。そこが、好まれたものであろう。

三川の句の初期の特徴として、大景よりも小景、新奇よりも平淡、主観よりも客観に近づけようとしている。子規は紅緑の句に、小景を詠じ瑣事を賦するに巧みと評したが、三川にも、その評はあたらぬことはない。しかし、これらの句でみるかぎり、巧緻というほどでなく、逆に大景を詠じた無技巧の句の方に、一抹の味わいが出ている。三川が小景を客観化して詠もうとしていることは、当時の子規の指導理論に忠実であったわけで、いまだ三川の句風といったものが定まってきたとは言えないのである。

この船十句の試みでは、渡し舟、風船、小船、藁の船、軍艦、帆船、笹舟、北馬南船といくつかの船を想像した自在さに、注意しておいた方がよいかも知れない。

このときの高点者は、碧梧桐、子規、木岡の順で、三川は八番目。

六人以上より点を得た句は

川口やしぐるゝ船の尻と尻

碧梧桐

肋(人)・春(天)・玲・東(天)・楽(地)・木・牛・規

渡し場や下駄はいて乗る舟の霜

子規

秋・楽(人)・木(天)・碧・玲(地)・肋・三

である。とくに碧梧桐の句は、景の中に情がこもった巧みな佳吟である。こういう句と比べてみると、三川はむしろ技巧のなさがひとつの特色として浮びあがってくる。

三川がいかなる句を選んだのか、そこに選句を通じた志向を伺うことができる。

子規、碧梧桐の選と比べてみよう。

三川選

天 宝船の印度へ渡る霞かな

肋骨

地 帆を上げて夕立雲の舟早し

春風庵

人 五月雨や船して渡る裏の川

牛伴

子規選

天 短夜の船のわかれや人多し

碧梧桐

地 角力取の船頭の老となりけり

木岡

人 乗合の船に夜寒のくさめ哉

木岡

## 碧梧桐選

天 秋、ゆうべ柳の蔭に船を解く

碧玲瓏

地 詩歌の船管絃の船春の風

木岡

人 乗合の船に夜寒のくさめ哉

木岡

三者を並べてみると、子規、碧梧桐の選にそれぞれかなりはつきりした選句眼の存在をみるが、三川は、その点が、これだけの句からは判然しないところがある。

子規は単に情景を截りとつただけの句ではなく、人事を詠んだ中に、「滋味」とか「趣味」が感じられないと佳句としない。当時の子規はしだいに天然よりも人事へ眼を向けていく。<sup>(11)</sup>

碧梧桐は、大胆に変調の句、無味ではあるが、調子の上の新調を買っている。

これらに対して、三川は、碧梧桐選ほど斬新でもなく、子規選ほど人事への興味を示していない。

宝船の一句を選んで、東洋風の幻想趣味の句を佳しとする一方、夕立雲や五月雨のような句を選んでいる。これらは、実景と隣り合った写実の句、地味な詠み方の中に一景がしっかり見える句である。

私は、三川の選句眼、やゝ判然としないといった。宝船の一句のような、当時の流行、蕪村調にひかれる一方、冷静に、精確に、実景のスナップ風の句を評価するという、一見隔った二つの傾向をよ

しとする見方をさしていったのである。が、こゝでは、三川の中にこのような二つの視点、よく言えば複眼の存在を指摘した方がよいかもしれない。

これは、明治三十年代の子規が、蕪村を評価しながら、一方写実写実を説き、「理想(空想)を発想の契機とする作品にも、絵画的客観的ということがありうる」<sup>(12)</sup>点を匂わせ、両者をつなげようとした志向に影響を受けているとも言えよう。

### 三、「新俳句」編輯の内情

#### (一) はじめに

明治二十七年五月三十日「小日本」第八十六号附録とした小冊子(三十二頁)「俳句二葉集」は春の部だけであるが、子規の最初の選句集である。

子規派や子規と交流をもつた周辺の俳人、さらに「小日本」への俳句応募者の中から選抜された投句者など、合わせて一〇〇名、四三五句を収録したもの。蕪村調の新派俳句により、明治俳句革新をすすめるようとした子規の企図を伺うことができる。

しかし、二月二十一日から五月二十五日までの「小日本」掲載句の選抜という短期間、限られた範囲のものであり、新聞の附録小冊子という性格もあって、それほど普及したものではない。子規自身

この冊子をもって、新俳句集を世に問う嚆矢とは考えなかったやうだ。

つゞいて、子規は、刪正本増補再版類祭書屋俳話(28年9月5日)の附録として、二十五、六、七年の「日本」の選句を蒐めて刊行している。これは「俳句二葉集」より以前の句を収めたものであり、独立した選句集とは、いささか言えないものである。

そこで、「我々の句集がもう出てまいり頃、誰しもがそんな気分を持ってゐた」(碧梧桐「子規の回想」三十一年三月十六日、徳富蘇峰が創立した民友社という、当時もとも名高い出版社から、上梓された「新俳句」が、子規派の類題句集としては、はじめて世に問うたものといつてよい。

正岡子規、上原三川、直野碧玲瓏共編で、「新俳句」のはじめに題すという類祭書屋主人の二〇〇〇字程の、俳諧史を踏まえて「新俳句」刊行の意義を述べた序文、鳴雪の「百年にして天明二百年にして明治の初日影」の呈句、虚子の俳句価値を論じた三七〇〇字の長い序文を付している。収録俳句五九八名、句数四八七〇句、目次九頁、本文四〇二頁、下村為山のすみれの装画表紙、さらに三十葉の挿絵を入れた四六判略装の句集である。

為山の挿絵のはじめの一葉が、「歳旦をしたりかはなる俳諧師」なる蕪村の句を、注連飾りと屠蘇を配した床に掲げた絵で、いかにも蕪村派と呼称され、尊崇の念あつ子規一門の雰囲気を出している。他に蕪村の二句、子規の三句が描かれている。為山は俳人牛伴

のことで中村不折の代りに、俳画を入れたのである。これは、当時としては、なかなか気のきいた編輯といふべきであらう。

たゞ、目次をみると、春夏秋冬を、上、中、下、雑、詞書といった五部に分け、詞書の部はさらに祝、別、悼、名所、恋、雑に分かれている。これは、子規の次の選句集「春夏秋冬」春之部が、時候、人事、天文、地理、動物、植物という合理的な部立をとっているのと比べると、古風さが目立つ。季語を、上・中・下に分けると自体、時間的な無理があるといえよう。

#### (二) 編輯の内的契機

子規、三川、碧玲瓏共編とあるが、一冊を出版するにも、他の何人かの俳人の尽力がいった。さらに前節で一部触れたような内部事情も存した。その辺のところを三川を中心に考察したい。

一体、「新俳句」編輯の件がいつ頃、だれによって出されたものかは、必ずしも明確ではない。

しかし、子規自身、二十八年五月大連より帰国の途上咯血し、神戸病院に入院、加療にあたっていた頃、すでに、なんらかの新派俳句集を出したいという意向があつたらしく伝えられる(上掲「子規の回想」)。だが、碧梧桐や虚子によって、子規の意思は実現されることなく、数年は過ぎてしまったのである。

日本派の俳句集出版のことが、資料の上からはっきりするのは、

すでに前節で取り上げた三十年三月八日虚子宛の子規書簡である。いささか重複するところもあるが触れていきたい。

「一昨日拙宅俳会。鳴雪翁は「娘嫁期近づきたり」とて来られず。三川来り候。三川の発起にて（日本）の俳句等を出版せん（民友社より）との事、小生も賛成致候。冬の部だけ先づ版にせんとて小生只今校閲中なり」

という文面から察するに、俳句集出版のことは、一昨日三月六日以前より話題になっており、正式に六日の俳席で、具体的な内容に關しても子規の快諾を得たというべきである。出版社が民友社であり、冬の部から順に版にする、そして、冬の部の草稿を、二日後の只今校閲中だということからは、突然子規の耳に入れた話題としては、あまりにも整ってすぎるからだ。

それに、鳴雪翁云々の一節は、三川との係わりが全くないともいえない。「新俳句」の題言に鳴雪の一句が掲げられることは、日本派の長老鳴雪に敬意を表したものにすぎないとも受けとれるが、三川あたりから翁に、すでに相談があったのかとも思う。

子規書簡集（明治40年3月5日虚子編）にはじめて出る三川宛のもの、虚子宛の十日後、三月十八日のものである。そこでは、冬の部の校閲が了り、次の草稿入手したいむきを、

「秋の部も大概御類題済候由御勉強に候、小生方はいつにても差支無之に付御光来奉願候」

と書いている。この一節あたりから推察するに、「新俳句」は、三

川が主になり、碧玲瓏が手助けをする形で、療養のつれづれに蒐集・編輯を志したものであろう。「御勉強」という一語は、熱心な新進俳人三川をあたたく督励するひびきがこもっている。このように推察するもう一つの資料は、碧玲瓏の書いた「故正岡子規氏」（ほたてがひ・明治36年5月）の一節に、

「僕等の編纂した「新俳句」の検閲でも随分君を勞して居るのである。僕等が各方面から類題的に蒐集した句殆んど三四万もあつたのを、一々丁寧に眼を通して、最も嚴峻な選抜法を採られたので、僕等は当時余りに君の標準を高くせられたのと余りに念の入つた眼の通し方とに一驚を喫した程である。」

これによって「新俳句」のもとになる草稿は、はじめ「各方面」から集めた三四万にもなる膨大な句群が記されていたことがわかる。三川はそれを冬の部から秋の部へ、さらに夏、春へと季節をさかのぼって類題別に編輯し、子規に選を乞うた。子規は削つたり、さし入れたりしながら、八分の一ほどに選抜した。「嚴峻な選抜法」を採つたものと碧玲瓏が驚いたのも無理はないであろう。

このような根気のいる、手間隙かかる仕事をするには、三川や碧玲瓏のような時間に余裕のある、熱心な療養者でなければなかなか出来ない面があつたのであろう。

三川は、子規を知るようになってから、とりわけ親近感をいだいていた。

自分と同じ肺病者だということ以上に、子規が教師という職業に大いに共鳴するところがあったからだ。これは、三年余後に子規が書いた随筆であるが、こんながある。三川在京当時も、草庵で似たような妄想の片言隻句を耳にすることはあったものと考えても、あながちおかしくはないと思う。

「ホトトギス」で募集の週間日記に子規は手を入れながら、ふと河内の田舎で毎日二里の道を小学校へ通う教師の日記に目をとめて、

「何の珍しき事もなけれど朝から夜迄の普通の出来事を丁寧に書き現したるために其人の境遇の詳細に知らるゝが面白きなり。殊に小学校の先生といふが猶面白く感ぜらる。近來小学校教員の不足といふ事が新聞に見ゆる度に余は田舎の貧乏村の小学校の先生になりて見たしと思ひ居りし際なれば深く感ぜしならん。」(明治

卅三年十月十五日記事「ほととぎす」四巻2号)

というのである。

子規派の投句家に小学校の先生が多いという要因を、このような子規の職業観と直接むすびつけるつもりはないが、信州における日本派の俳人の多くが、とりわけ小学校の先生だということは、三川を通して伝わった子規の「貧乏村の小学校の先生」最真への共感が幾分かあったものであろう。

子規の病床での「俳句分類」の仕事が、子規のスタディならば、「新俳句」の膨大な資料蒐集、整理は、三川らのスタディ、「勉強」

といつてよい。

三川の中に、子規の研究心にあやかろうという意識があったのではないだろうか。

北里の仲間、碧玲瓏や東洋たちが、三川を先生と渾名して呼んでいたという<sup>(14)</sup>のも、博学で研究熱心な三川に一目おいていた楽しい逸話である。

明治二十九年は、子規の生涯の中で作句数三〇三八句ともっとも多い年である。

碧梧桐が「新声」、虚子が「国民新聞」の俳句欄選者となる。根岸の子規庵で三月から俳句例会運座もはじまる。と、ほと時を同じくして、四月より、前節で論じた「月次十句集」が開始される。まさに日本派俳句興隆の年である。翌三十年の一月二日から、子規は、「日本」に二十三回に分けて、長文の論考「明治二十九年の俳句界」を連載する。

これは、表題は二十九年とあるが日本派俳句の過去五か年間の総括にあたるのが、昨年一か年だとみたわけである。

そして、碧梧桐、虚子の双璧(とくに29年は碧梧桐、30年は虚子が代表)によって試行されつゝある新派俳句の不易、流行を世に喧伝する文章を総帥が書いたものといつてよい。三川ら、子規の近くにいる、その一挙手一投足を注目している門下生にとり、この期の昂ぶりを見逃すはずがない。

（三）類題句集編輯を求めらる声

以上が三川らにとって、「新俳句」編輯の内的契機、要因とでもいうものならば、さらにそれを大きく包含する、日本派の俳句アンソロジーを求める外的な事由が他にあったと推察できる。

それまでは首都の新聞や雑誌（日本・国民・日本人・めざまし草・太陽・早稲田文学・新声など）をかりた、在京俳人たちの新派俳句運動であったものが、二十九年から三十年前半にかけて、地方の新聞・雑誌へ波及し、その相関のなかで日本派の地方グループが統々と生まれることになる。

その一つ、ティピカルな形が、三十年一月松山での極堂ら松風会グループによる「ほととぎす」創刊であろう。またそれまでにいたる「海南新聞」の役割も大きい。

これらの点に関して、すこしく資料で裏付けておきたい。白雲（飄亭）の一文は、その大観である。

「新文壇に上りし俳句の気運は首府東京に於て養成せられ、今や殆んど其流行の極に達せんとするの勢となりしが、頃日其勢力は漸く延いて地方に及ぼし、各地の文学界亦皆欣んで之を迎ふる者の如く、滔々たる潮流は遂に我国を浸すに非ざれば止まざる者に似たり。こは近時地方新聞及び雑誌等が争ふて俳句を紙上に掲げ或は之を論ずる様を見ても推測するに足らんか、而して其流行の

勢力は恰も東京を中心とせる放線状を画すべく殊に関東地方に於最も盛なるを覚ゆ。関西に於ては静岡京都、海南にては伊予地方亦此兆を見るも、中国九州地方は尚ほ未だ其勢力の甚だ微弱なる者あるを感ずるなり。」（俳句界近時の形勢「日本」明治29・5・6）  
（濁点―白雲）

三十一年になるが松山の松風会のもようを「海南新聞」は次のように報じている。

「新派俳句の勢は漸を以て加はり今や將に天下に普からんとす、其の地方俳句会と称するもの曰満月会、曰松風会、曰百文会、曰北声会、曰松声会、曰碧雲会、曰無声会、曰芙蓉会、曰何、曰何、殆んど枚挙に遑あらざらんとす、而して中に就て其の歴史の最も古きもの、且つ会員の最も多きものは我が松風会にして、依りて以て天下に重きを為すものも亦た我が松風会たらずんばあらず、昨夏の如き豆を咬りて句を捻るもの殆んど夜を以て日に繼ぐの觀ありしは中央俳壇をして尚ほ顔色無からしめしところ、是れ松風會員諸君の明に記憶するところならざるべからず」（松風会・「海南新聞」明治31・7・26、無署名）

右の文中に紹介された地方俳句会の結成年月と代表俳人を示しながら、地方グループに触れると次のごとくである。<sup>(15)</sup>

明治29・9 京阪満月会（京都）

鼠骨・露石・青嵐・紫明ら



- 30・1 奥羽百文会(仙台)  
 紅緑・鬚男・樵村・古奥ら
- 30・4 北声会(金沢)  
 秋虎・洗耳・秋竹ら
- 29・4 (公表は30・春) 松声会(松本)  
 三川・奇峰・犬巢・東街ら
- 他の地方グループ  
 山城 京都満月会その他に詩瘦会  
 摂津 大阪満月会、三日月会、有声会  
 武蔵 連友会  
 常陸 風月会  
 信濃 松声会その他に二葉会  
 上野 いなのめ会  
 岩代 隈水吟社  
 羽後 北斗吟社  
 加賀 北声会その他に磬声会  
 越中 越友会  
 因幡 卯の花会  
 出雲 碧雲会  
 伊予 吟風会、無声会  
 土佐 十七字会  
 肥後 紫明吟社

朝鮮 仁川新声会  
 浦塩斯徳 笠蓑会

このように各地に日本派の俳句グループが結成されると、当然グループ内の作句研究活動を旺盛にし、さらに仲間を勧誘するためにも、俳句手引き書、新派の類題句集を求める声が出てくる。碧梧桐の言う、だれもが句集を待望する「気分」を持っていったという感想を、私は、よく日本派の俳人の気持を代表したものとして、こゝでもう一度思いおこすのである。

さて、三川、碧玲瓏らをはじめた日本派俳句集の編輯を、子規が承認し、自ら校閲することになった事由に関して、月次十句集の存在があったのではないかという考察を前節でした。こゝでは、その点については触れない。

#### (四) 民友社との係わり

ところで、日本派の俳句集が民友社から刊行されるという点に、もう一度目を留めてみたい。

民友社は当時国民新聞という発行部数では報知ややまとを抜いて、もっとも多いと推定される新聞を出していた高名な出版社である。

子規派の俳句集が日本新聞社などではなく、民友社から出るとい

うことは、当時、それほど日本派の俳句運動が世評高く認められていた点をかわれたのであろう。

しかし、その他にこんな内部事情が考えられるのである。

碧玲瓏は二十五年に上京以来、北里へ入院するまで国民新聞編輯局員であった。母子二人きりの生活で、余命一年と宣せられていた由であるが、そんな係わりで、病院近くの芝区南佐久間町にいた国民新聞記者の中村楽天が病院に出入するようになる。そして、楽天も三川グループの一員となって親密になっていった。句集出版の話は、碧玲瓏から楽天に伝わり、実務の一切は楽天によりはこばれていたと推測される<sup>(17)</sup>。

三十年三月から比較的順調に進んだ、子規の草稿取捨添削も、六月下旬の重態以来、九月まで一頓挫をきたすことになる。その間、子規の代りの虚子は手をつけず、結局又子規をわずらわして再開された。九月十三日の三川宛の書簡によると、夏の部の大方は校閲が了ったとあり、つづいて、句稿が、

「楽天氏杯の説を聞いても余り多くては困るといふことだし、小生も其事は前より推量して居る事故、今度は成るべく削る方の方針を取り申候」

という文面がある。これによっても楽天が発行に関して係わりがあったことが知られる。

それに、句集出版を虚子に知らせた例の三月八日の手紙で、「三川の発起にて（日本）の俳句等を出版せん（民友社より）との事、小

生も賛成致候」と、民友社を括弧にくくり虚子に知らせた子規の氣持の中には、前年から国民新聞の俳句欄選者となり、民友社と係わりを持ち出した虚子の耳に入れておき、できるだけ円滑にことが運ぶようにという、配慮があったことも推測可能であろう。

いづれにしても、「新俳句」は、

菟集・編輯 三川・碧玲瓏

校閲 子規

発行実務 楽天

という、このチームワークですすむのである。

(田) 「新俳句」編輯状況の推移

次に「新俳句」の編輯、校閲の具体的な内容に関する事項を、現在判っているかぎりの子規書簡によって、表示してみたい。

「新俳句」編輯状況の推移表

年月日	事項
M 30・3・6	。八日本派俳句集√(新俳句)出版立案される。(三川発起による。)
3・8	出版社は民友社と内定。(楽天・碧玲瓏の力か)
	。出版の件、子規賛成。正式に決定。冬の部より順次刊行(予定)
	冬の部 校閲中(子規)

	6・21	5・23	4・18	3・18
<p>校 閱</p> <p>△9月まで中断▽</p>	<p>この頃までに「秋の部」校閲大方了か。</p> <p><b>俳句原稿8巻</b> (夏・春・新年・愚庵十二勝か)子規落掌。</p> <p>。この頃子規健康すぐれず、碧梧桐・虚子に代りを依頼したい由。</p>	<p>△新俳句▽と名称決定はこの頃か。</p> <p>▽「秋の部」へ三川14句・碧玲瓏59句入集。</p> <p>校訓導在職</p> <p>5/3より東筑村立島内尋常高等小学</p>	<p><b>秋の部</b> 類題整理了(三川)、間もなく子規校閲へ。</p> <p>。子規、新聞句稿切ぬきを三川へ送る。</p> <p>。「夏の部」以後の参考資料のためか。</p> <p>。三川4月下旬信州松本へ帰国予定。</p> <p>子規・出版中止を氣遣う。</p>	<p>校 閱 了。</p> <p>三川在京中に子規より「冬の部」稿を受け たか。</p> <p>▽「冬の部」へ三川17句・碧玲瓏 24句 入集。</p> <p>類題整理了(三川)、間もなく子規校閲へ。</p> <p>。子規、新聞句稿切ぬきを三川へ送る。</p> <p>。「夏の部」以後の参考資料のためか。</p> <p>。三川4月下旬信州松本へ帰国予定。</p> <p>子規・出版中止を氣遣う。</p> <p>5/3より東筑村立島内尋常高等小学</p>

	10・21			10・18	9・13
<p>△三川、校了稿の整理後、碧玲瓏へまわしたものが▽</p>	<p><b>句稿子規第一回すべて校了</b> (13冊+すでに三川のものにある「冬の部」稿)</p> <p>。碧玲瓏から送られてきた句稿もすべて三川へ送付。</p> <p>。「冬の部」再閲をやる由。出版をいそぐため。</p>	<p>▽「新年の部」碧玲瓏1句、「愚庵十二勝」へ6句入集。</p> <p>▽「春の部」へ三川20句、碧玲瓏24句入集。</p>	<p>句削除。秋声会一派(竹冷・紅葉・酒竹・小波)や漂龍の句削除を三川に要請。これは同人間でけんけんごうごうたる議論があり、自派だけの「純粹」さを出そうとしたもの。(18)</p>	<p>△「秋の部」と先の俳句原稿8巻であろう。</p> <p><b>句稿12冊</b> 校閲了、三川へ返送。残り1冊。</p>	<p><b>夏の部</b> 大方校閲了。子規、碧梧桐に再閲依頼。</p> <p>。子規一部校閲方針変更。楽天などの説できびしく削る。このころ分冊から合冊に編輯変更か。</p>

11・20	△句集出版の件、三川、碧玲瓏・楽天に一任 句削除 。子規、秋声会一派及び漂電の句再度削除 を碧玲瓏に要請。 。子規、「新俳家句集」出版の専断の処 置に立腹。
12・10	目欠 。子規、目録(季題と頁数)を付すように 碧玲瓏に要請。
31・1・28	△まもなく印刷へまわる▽ 序文 。子規(31・1執筆)、鳴雪(31・1題 言)虚子(31・1・28 序文) 。楽天などが主にあたったか。
3・11	校正 。子規校正を督め、かつ五か所の誤り指 摘。 。子規季題の順序と作者の順序の不体裁 を碧玲瓏に言う。 。民友社より三川への礼として「新俳句」 五冊貰ったのみという。(19)
3・16	印刷
3・30	刊行

『新俳句』正岡子規聞、上原三川(良三郎)・直野碧玲瓏(了之晋)  
 編 明治三十一年三月 十一日 印刷  
 十六日 発行 定価三十五銭  
 発行者 東京市京橋区日吉町四番地 渡辺為蔵

印刷者 東京市京橋区西紺屋町廿六番地 青木 弘  
 印刷所 〃 株式会社 秀英舎  
 発行所 東京市京橋区日吉町四番地 民友社

(六) 「新俳句」の新しさ

右のような編輯状況を経て、ほど一年がかりで「新俳句」は刊行された。収録された句は、二十五年から三十年冬、再校了ぎりぎりまでのものが入った。

先に出た「俳句二葉集」春の部の句も、選句対象にされ抜かれており、日本派のはじめて公刊した四季揃の類題句集としてはずかしくないものである。

それだけに子規は、校閲中にいろいろ気を遣っている。子規が気を遣ったいくつかの点がすなわち、「新俳句」の新しさといつてよいであろう。

以下、その主要な問題点に触れながら、「新俳句」の特色をあきらかにし、あわせて、三川の句に目をとめていきたい。

「新俳句」の序文で、子規が

「蓋し其集たる之を元禄天明の諸書に比すれば規模大を加へ、之を類題発句集、故人五百題、発句題叢等に比すれば彼には時代の特色無く此には時代の特色あり。余は此新面目を備へたる俳書の

刊行を喜ぶ者なり」

と述べた。「新俳句」の「新」とは、「時代の特色」であり、そこに「新面目」があると子規は考えた。

「新面目」と明言するほどの「時代の特色」とは、いかなる面をさして言うのであろうか。まずこの点から問題にしよう。

「新俳句」がなぜ、「冬の部」から編輯されていったのか、これは、たしかな理由がある、なにか根拠に基いたことなのかどうか、あきらかではない。たまたま考えられるのは、三川や碧玲嬢が、句の蒐集、整理にあたった時に、もっとも身近に実感をともなう当季から手をつけたのではないかという推測は成立つ。

編輯方針としても、後の「春夏秋冬」が四季別四冊立で刊行されるように、「新俳句」も分冊で出される予定であった。

合冊にするか、分冊にするかということは、編輯の中で明確になつて行くことであるが、そのことが、子規との間で、論じられたという形跡は、現在残存している資料で判断するかぎりない。

たゞ私が憶説を述べるのは、三十年六月に子規が腰部疼痛はげしく重態に入るといふ校閲中断の時間をはさんで、九月に再開する、その再開の時に、子規の校閲方針が変る。以後、きびしく削ることになる。これは当然、三川らの編輯の仕方にもひびいてくることであつた。

「楽天杯の説を聞ても余り多くては困るといふことだし、小生も其事は前より推量して居る事故、今度は成るべく削る方の方針を

取り申候。大兄へは御氣の毒なれど、其方が却て成功に近からんと存候。ことによれば前のも又削りてもよいと思ふ位に御坐候。右あらかじめ申上候。」

という文面の「大兄へは御氣の毒なれど」とは、勿論、三、四万という膨大な句量を蒐めた三川らへの同情の言葉であるが、この一言によつて、四季別分冊という当初の計画は消えたのかもしれない。四季別分冊という従来の類句集出版の伝統を破る形で「新俳句」は出たのであつた。

結果的には合冊となつたにしても、子規の当初の思いには、まず「冬の部」に「新面目」をもたせようという氣持が大いにあつたのである。

「此中へ冬帽、手袋、やきいも、毛布、襟巻、冬服、ストゥ等  
の新題を季の物と定めて入れんとす。貴兄も此題にて御つくり被  
下度御送附願上候」(三月八日)

これは、虚子宛書簡である。

右のような新題を他季と詠み込むのではなく独立した季語として出した、それを愛弟子に求めたのである。

「新俳句」には「冬の部」に、

クリスマス、燵炉、冬服、冬帽、外套、二重まはし、吾妻コート、毛布、襟巻、手袋、焼芋などといったものが新題として入っている。今日、われわれがなんの不思議も感じないで冬季と認めている季語群であるが、はじめて「新俳句」に採用されたのであつた。

たとえば、毛布の句例は、こうである。

毛布の青きは更に鄙びたる	虚子
綱ゆるき毛布包みの荷物かな	碧梧桐
ケットーの安きを買はんとす柳原	愚哉
ケットーの赤きをかぶり本願寺	子規
毛布被る一むれ寄席の帰りかな	子規
四辻や毛布に車夫の夜明けたる	三川

三川が新題として入集したのは、この毛布一句である。子規他の句と比べても遜色のない佳吟で、車夫の毛布というモダンな明治の風情が単なる風俗画ではなしに伝わってくる。ただし、今日のわれわれに、ある発見がより感知されるのは、虚子、碧梧桐の句の方であるが。

季のことばを一つでも見つけたらそれは手柄という点では、新題を加え得た「新俳句」はたしかに「新面目」を主張できたのである。

三川が後年「はゝき木」誌上で、新題募集に力を入れ、

夜学(冬季)、飴市、どてら、汁粉、田うこぎ、蛭蛸、かげろふ

(夏季)(胡桃沢四沢提出)

藁仕事、縄なひ、草履造る、草鞋造る、まぶし折る、蕨織る(冬季)「冬、雪降り寒くして家外に出て働くに都合あしき時、農

家にてなす普通の仕事なり」(宮林董哉提出)

田楽豆腐、園遊会(春季)(矢野奇遇提出)

初化粧、初結び、初髪(新年)、障子張る(冬季)(夢拙、幾句拙提出)

蕃茄、トマト(夏季)(田中歌朗提出)

すぐり、朝草刈り、洪水、大水、出水、水害、つりふね草(夏季)

(三川提出)

さらに、岐阜の名和昆虫研究所の専門誌「昆虫世界」に設けられた「昆虫文学」欄俳句選者となつてからも、

松藻虫、野虫、竜蝨、風船虫、瓢虫、虱、ありまき、けら、尺蠖、天牛、

などと数々の新題を作り出す。

こういった三川の新題発掘者としての一面は、「新俳句」時代に子規から学んだ革新精神の現われであるといえよう。

新題が季語の発見ということばの面からの革新ならば、定型のリズムをくずした破調に新しさを見出すのは、句調の面での「新面目」と言える。

この面から「新俳句」を検討すると、すでに松岡満夫氏が論じておられるように、定型律以外をすべて変調とするならば、全句数の

約17%、八百余句がそれにあたる。

短いのは、

鶯を思ふ、鶯の鳴かざる日

衣がへして、燭帝に見えんか

の二段切異体句からはじまり、果ては、

案山子喟然として曰く如かず遺民とならんには

送露月

毒茸の喰ふべからざるを悟り君帰る

の長句まで、破調、乱調の句が見える。

語数は定型に近くとも、リズムは定型律を脱し、後年の新傾向を暗示する碧梧桐の、次のような句も収録されている。

若葉日さして小鳥など鳴くうれしき

日陰蝶がうら淋しさうにとんで居る

水害のまだ青い稲を刈って居る

しかし、子規は、このような破調や乱調を「新俳句」の「新面目」とはかならずしも考えなかったようだ。

定型律にない新しさを理解し、自分でもいくつかの句作をし、次の十句を、「冬の部」へ新題として入集しようとまで考えた。

把栗

望雲

左衛門

碧梧桐

芋屋の前に焼けるを待つ下女子供なんど

書生富めりケットー美に盆栽など飾る

つきくしからぬもの日本の家に燠炉

ストーブにぬれたる靴の裏をあぶる

外套を着かねつ客のかゝへ走る

外套の新しきズボンの穴をおほひたる

汽車の切符買はんとして手袋脱けざる

入営を親父見送る朝まだき

徽章なき帽は出営の人なりし

二重まはしを買ひ得ずして其俗を笑ふ

(傍線—宮坂)

けれども、例の九月の校閲方針変更の手紙で、一旦は入れたこれを削除するように三川に求めている。

子規の破調句に対するこのような評価の揺れは、「明治二十九年の俳句界」でも、虚・碧兩人の新傾向として肯定しながら、他方、「吾人の臆測を以てすれば所謂新調なる者は、一時の現象に過ぎずして永く繁榮することなかるべし。唯俳句の一変体として存在すべきのみ」と、結局全面的には認めていないのである。

厳格ではないが、「新俳句」でも、この態度がとられたと見るこ

とができよう。

三川が「新俳句」に入った句数は、六十八句(春20、夏17、秋14、

冬17、新年、愚庵十二勝なし、そのうち、定型律をいくぶんくずして  
いるのは、

鴉地蔵にはく日の永き

駄菓子店に螢籠なんど売って居る

二句だけである。新題発掘には、きわめて意欲をもった三川である  
が、所謂流行の「新調」にはついに共鳴するところがなかった。こ  
こにも三川の厳格な態度と俳句詩型へのある洞察があった。

このように見てくると、では、一体、「新俳句」の新しさとはな  
にかと改めて問わなければならない。

もうすこし「新俳句」の子規序文に耳を傾けたい。

「明治二十五年以後は漸く元禄の高古を摸し文化の敏瞻を学ぶ。

之をすら世人は以て奇を好み新を衒すと為せり。其後蕪村を崇み  
天明を宗とするに及んで文人学者は始めて俳句の存在を認めしが  
如く可否の声諸処に起る。可否の声忽ち消えて俳句は其価値の幾  
分を世に知られたる時、元禄にもあらず天明にもあらず文化にも  
あらず固より天保の俗調にもあらざる明治の特色は次第に現れ来  
れるを見る。此特色たる天明に似て天明よりも精細に蕪村に似て  
蕪村よりも変化多し。芭蕉其角等の夢にも見えざりし処、蒼虬梅  
室輩の到底解する能はざる所に属す。しかも此特色は或る一部に

起りて漸次に各地方に進播せんとする者、此の種の句を「新俳句」  
に求むるも多く得難かるべし。「新俳句」は主として模倣時代の  
句を集めたるにはあらずやと思はる。」（「新俳句」のはじめに題す）  
右の一節は、一見すると、「明治の特色」を絶対化した口吻とも  
伺える。が、結局は、「新俳句」は「模倣時代の句を集めた」の  
というところに眼目がある。

「天明に似て天明よりも精細に蕪村に似て蕪村よりも変化多し。」  
と「新俳句」に盛られた「明治の特色」を評価しながら、それは、  
「天明」「蕪村」と対比されることで、きわ立つ「精細」であり  
「変化」であることを、見きわめている。

俳句がわが国独自の詩型をもった伝統文学であるからには、依拠  
する俳句の方法は、元禄や明和・安永や天明という過去の時代の方  
法以外にないことは、「俳句分類」のスタディを通して身に実感し  
ていることであった。

俳句は模倣だという言葉だけを受けとるならば、二十五年の「類  
祭書屋俳話」以来鋭い筆鋒で攻撃してきた旧派月並俳句宗匠と、一  
見類似の口吻である。が、そこにこそ子規のいかにして、格に入っ  
て格を出るかという、まさに血みどろの試行錯誤の闘いがあったの  
だ。「新俳句」は、その苦闘の象徴といつてよい。

そこには、おのずから、「模倣の中自ら其時代の発現しあるを疑  
はざるなり」ということになるわけで、「模倣」を怖れるならば、  
ついに「時代の特色」も「新面目」も、掌中に納めることができな



いと、子規は考えていた。

明治三十年代初頭、西洋流の「独創」意識が尊ばれ出す時代に、「模倣」という独創を否定した方法に徹する中で、自ら模倣を超えた「時代の特色」が出るのだと考えるのは、ある意味では、ひとつの矛盾をつねに抱きながら生きることでもあった。

しかし先に述べたように、伝統詩型の方法を身につける以上、避けることのできない絶対であったのだ。

ところで「模倣」を通して、なにを学ぶのであろうか。改めて問うまでもなく、それは内味である。精神とか心とかいう抽象した表現よりも、子規流にいうならば、「趣味」であり「雅味」である。

俳句の方法を学ぶとは、結局「趣味」とか「雅味」という表現で希求されている高みまで到達することを本来含んでいる。

「新俳句」を「模倣時代」の句集と称した子規は、三十四年の「春夏秋冬」春之部の序では、「蕪村調成功の時期」の句集と言い、さらに、

「太祇蕪村召波几董等を学びし結果は、啻に新趣味を加へたるのみならず、言ひ廻しに自在を得て複雑なる事物を能く料理するに至り、従ひてこれ迄捨てて取らざりし人事を好んで材料と為すの異観を呈せり。これ余が曾って唱道したる「俳句は天然を詠ずるに適して人事を詠ずるに適せず」といふ議論を事実に打破したるが如し。」(傍点—宮坂)

と、記している。ここでは「模倣」の語が消えて、はじめて「新趣

味」というひとつの行きついた境地を示す語を肯定的に明確に打ち出すのである。

してみると、「新俳句」で言う「模倣」とは、「趣味」、「雅味」といった境地までいまだ達しない前段のところにあつたと考えられる。

「新俳句」の句風をさぐるに、太田鴻村氏<sup>(22)</sup>は「紛々たる人事と雑然たる自然との書生的表現(誇大的発想と奇型的表現)」が明治新俳句の基調だと言ひ、きわ立つ特色として、用語と句法とにおける漢詩漢文の影響と古典趣味を第一に挙げる。

松岡満夫氏は、鴻村の見方を更に敷衍して、空想的懐古趣味、超脱趣味を説き、そして、「新俳句」全般であまねく察知できるのが、写生趣味であると見て、「印象明瞭な句は或はこの期に於ける写生趣味の最終の到達点とも考へられる。」と述べている。

私もこの両氏の論に大筋では同感である。「新俳句」での試みは多様であるが、やはり碧虚二氏の「新機軸」が、この句集を代表する二面と考える。

赤い椿白い椿と落ちにけり

碧梧桐

乳あらはに女房の単衣襟浅き

「椿の句の如き之を小幅の油画に写しなば只地上に落ちたる白花の一団と赤花の一団とを並べて画けば則ち足れり。蓋し此句を見て感ずる所実に此だけに過ぎざるなり。」

「乳あらはにの句は女の半身像と見て可なり。是れ亦特種の妙味あるに非ずして普通の事を上手に写したる者なり。」（明治二十九年の俳句界）（傍点―宮坂）

子規は右のような句を写生写実に偏した意匠なき、絵画俳句だと称して、これも俳句の一進歩であるが、余韻余情のない、このような句の前途に疑問をなげかけている。

同じことは、虚子の「時間的俳句」、「抽象的俳句」

窓の灯にしたひよりつ払ふ下駄の雪

虚子

屠蘇臭くして酒に若かざる憤り

老後の子賢にして筆始めかな

に対しても、「無味に傾き易き性質を帯びたる趣向」（傍点―宮坂）が今後繁栄するとも思われないう言っている。

子規は句法、主題、措辞、句調の新しさを評価するに複眼をもった俳人であった。そうであるからこそ、一方に偏することを怖れたえず調和や均衡を考える人であった。

「新俳句」に収録された句群のいくつかの「新面目」が単なる時代の流行として、刻々と古びゆく、移りゆく、流れゆくものの上に存することに気付いていた。俳句の「新しさ」とは、結局、過去の歴史と比べて評価する以外ないのだという相対観念を、処生感とし

て、大局的に身につけていたのが子規である。だから日本派の真髓と評される「春夏秋冬」春之部を上木するときでも、「而して今日蕪村調成功の時期といふも他日より見れば如何なるべきか固より予め知る能はず」と記すことができた。

この子規の考え方は、まさに正論である。しかし、全体にあまねく眼を配る周到さ、流れを包括する見通しのたしかさなどはそこに感知されても、反面、創造者としての、中庸を破り、ものに偏した、者がもおもしろ味に欠けるところがあつたとも言えるであろう。

「新俳句」の到達した一面を、子規は「無味」といい「妙味」がないといい、ただ「これだけに過ぎざるなり」と称したが、その点に「妙味」を見た人もいたのである。

寺田寅彦は、旧制高校二年の夏休みに、はじめて俳句と出会い夢中になって「新俳句」を読み耽る。その時の感動を、「天地万象がそれ迄とは丸でちがった姿と意味をもって眼前に拡がるやうな気がした。」と記し、

「たとへば

古井戸を覗けばわっと鳴く蚊かな

杜昌

と云つたような句でも、当時の自分には、いくら説明したくても説明の出来ない幻想の泉となり、不可思議な神秘の世界を覗く窓となるのであつたが、父に言はせると、「唯、云つただけではなにか」といふのであつた。（中略）

「赤い椿白い椿と落ちにけり」(碧梧桐)でも父の説に従へばなる程「云ふただけ」である。併しこの句が若かった当時の自分の幻想の中に天に沖する赤白の炎となつて焰え上がったことも事実である。(吉村冬彦・「俳諧瑣談俳句研究・昭和9・3」)と見事に描いている。

三川の句を読みながら、私がしばしば思いおこしたのは、この寅彦の一文であった。

三川の句、「唯、云っただけ」の句が多い。しかし、それは、誰も言わないところにはなにもなく、そう言われてはじめて、「唯、云っただけ」だなど感じられる句である。

改めてなにかものを見ようとすると、もっと先か、ごく手前を観念として見ることはできるが、「もの」がもっているひとつひとつ異なった位相を、言葉で朴訥な掴み方で、おおらかに捉えた、こういう句は、なかなか出来ないのである。

ここでは、先に掲げた月次十句集と「新俳句」から数句示したい。

明治二十九年

道はたや一膳飯の夏柳

粟飯のめんつう寒し川普請

松涼し巡礼親子飯をくふ

明治三十年

畠打つ十歩にあさる鴉かな

砂原や短き草にばった飛ぶ

尼寺の杉垣低き紫苑哉

両国の花火開くや舟の上

秋近き風が吹くなり橋の上

明治三十一年

破垣や鬼灯熟す草の中

明治三十二年

大仏を写生している桜哉

明治三十三年

押し合うてせり出されたる目白哉

新

新・月

月

新

月

月

月

月

※月次十句集 新俳句

傍線あたりの措辞の斡旋に、とりわけそんな掴み方をみるのである。状況語やさらに感覚語さえもが、「唯、云っただけ」で、別に象徴にも暗示にも寓意にも用いられていない。そこに、もの足りなさや余情余韻不足を思わないではないが、現代のわれわれが陥っている手続きの煩瑣な思いから抜け出た、ことばのすがすがしさをかえって感ずるのである。これは真水の味ではあっても、ミネラルウォーターの無味とは違うのである。

「新俳句」には三十年十月までの句六十八句が入集していることはすでに述べた。その内訳は、子規の手控「承露盤」より23句、「日本」より6句、他は三川句稿からであるが、「日本」の4句は

「承露盤」と重複している。

三川俳句に関しては、別に全般にわたって論じたいと考えているので、ここでは、初期の特色についてほんの一端を記す。

三十二年あたりから句に詠まれる小景に巧みさが出てくる。たとえば、こんな句である。

夥しき煤や仏を洗ひけり

これは、「ほととぎす」三巻3号「募集俳句」仏（冬季結）で、虚子選の天位に入選した句で、それまでにない傾向の句である。上掲の句では、翌三十三年の目白の句なども、同様な佳吟と言えよう。

私は、今、三川の句の特徴として、「もの」がもっているひとつひとつ異なった位相を言葉で朴訥な摺み方で、おおらかに詠んでいると述べた。後期の句では、その特徴をあらわしている作品例を紹介するにとどめたい。

かたまって水鳥遠し湖の面	「ははき木」	明治37・10
桐植てつくく法師来鳴き鳥	「長野新聞」	38・9
桔梗も萩も萩に荇られけり		38・9
北の海へ吹荒れて行く野分哉		38・10
水鳥の湖心に遠く暮んとす		38・12
川風の吹きあほりたるどんど哉		39・1

大雪のあした早来ぬ豆腐売

毛なし桃毛桃も紅く熟しけり

とんぼうの留らぬ杭は無かり鳥

短日の城下に暮れて戻りけり

柴刈の山に短き日なりけり

公園の月夜に遊ぶ落葉かな

遠鼓春の雨夜の更けにけり

帽子店いつしか夏となりぬ

涙かんでよき子となりぬ更衣

耳近く蚊が来て鳴いて眠たさよ

おわりに、表現、用語に関して触れる。蕪村調と言うとまず漢詩漢文表現が挙げられるが、三川には、その傾向が少ないことはすでに前節で指摘した。

三川の句は佶屈なところがなく明浄であり、平易である。その中で、発想の特異さは俗語、口語をとり入れ、擬態語を好んで用いるところにある。

池広く菖蒲河骨なんど咲く	新俳句
小き籠にたんと入れたる螢かな	//
御停止やしよぼしよぼ寒の雨が降る	//

39・3

39・9

39・12

40・2

40・2

40・4

40・5

40・6

40・6

40・7

この特徴は、古語をとりこむ試みとともに、三川の独得な句調を形成する一つとなるものである。ここでも、後年の例句だけ掲げておきたい。

△漢語表現から俗語、口語、擬態語発想へ▽

たんとなる隣の家の南瓜かな

「長野新聞」 38・9

蜻蛉の水に尻打つ面白や

38・9

何ぢやかぢやあれぢや是ぢやと年暮れぬ

38・12

ちよと引けばちよと頷くや尻

39・3

尻出して隠て居るや馬鹿な蚤

39・8

盗んだる柿の渋さよ一つなし

39・11

つと何を追かけ行きしとんぼ哉

39・12

眼を病んで籠るや転日の永き

40・4

諸声のひたと鳴き止む蛙かな

40・6

△古語をとりこむ試み▽

水祝あこぎに水を祝はれし

「ははき木」 38・2

はしけやし椽に馴れ来る寒雀

「長野新聞」 39・2

こりずまに手馴ぬ妹が蚕飼哉

39・5

#### 四、旧派との論争

##### (一) 第一次松声会

「自分が子規の家で俳界の人達と交を訂して一かどの俳人となつた心持で（今から見ると稚氣満々たるものであったが）郷里へ来て伊予の松風会に倣つて松声会を起して気焰をあげて居ると、そこへ三川君が東京から帰つて馳せ加はつたのが君と本当に顔合せをした初めであつたらう。しかもそれが一見旧知の如くになったのである。風交といふ言葉があるが君との交りはこれであつた。」（上原三川のことども）昭和三年一月四日信濃教育）

と矢ヶ崎奇峰は書いている。

上原三川が北里伝染病研究所を退院し、郷里へ帰松したのは、三十年四月下旬であつた。東筑摩郡島内村青嶋、奈良井川畔の兄川船君十(23)の家に寄寓し、和田村の養家先から、妻あさと長男寅太郎を呼び寄せる。寅太郎は当時尋常科二年生である。

君十は、島内尋常高等小学校の校長であつたが、五月十三日には北信埴科郡坂城尋常高等小学校の校長に転出したので、三川は兄の後を襲い校長に就任する。そして島内に三十七年四月二十七日まで足掛け八か年在職するのである。

奇峰の年譜によると、右の回想に出る松声会を松本で結んだのは二十九年春ということである。ところが、明治三十一年十月、東京に移され発刊される「ほととぎす」第二巻2号（31・11・10発行）、すなわち、東京での第二号目の地方俳句界欄に、奇峰が書いている松声会報には、こうある。

。松声会（信濃）

奇峰

五六の俳友を得て、松声会の起りしは去年の花散る頃なりけむ。暑往寒来今歳復秋に入る。会友の離散時にありといへども、今や毎月会の出句者十二三名、月毎に兼題を分ち時々相会して雅懷を暢ぶ。其間多少盛衰なきにあらざるも亦以て新派の俳句の漸次に周囲の注意を惹くに至れるを知らん。此時に当てほととぎす一大改善を為す。此指南車あり会友大に斯道に奮はんと欲す。

(傍点—宮坂)

そして、「左に近什一二を記す」とある。これは「ほととぎす」に出るはじめての会報なので、参考のために、作品も次に記す。

醒め易き新酒の酔や雁の声	花兄
踏切に汽車待つ稲の車哉	三川
稲刈や笠の上飛ぶ赤蜻蛉	螢城
山寺に狸とかたる夜寒かな	黙仏
村塾の師にまゐらす新酒哉	木公
鴉なくや弱き日のさす城の壁	犬巢
簑虫に夕日さしけり初時雨	栗庵
蒲団着て物打ち語る夜長哉	菜雨
物思ひ居れば雁鳴く雨夜哉	東街
町を出つれば虫啼く野辺や二日月	奇峰

この顔揃れが松声会最初の同人である。後の太田水穂は東街と号

し参加しており注目される。

ところで、この「ほととぎす」の記事が正しいものならば、松声会は「去年の花散る頃」、すなわち、三川が帰松した三十年四月あたりで結成されたことになり、奇峰の記憶や年譜の記事は正確とは言えなくなる。奇峰の記しあやまりであろうか。この点、今のところ、私はどちらとも決め手になる資料が乏しい。ここではこんな風に考えている。

奇峰が結成したのは、たしかに二十九年の晩春であろう。が、松声会の存在が全国に知れるのは、三川が加わったときからで、前節で紹介した松山の松風会記事も結成時期を、金沢の北声会（明治30年4月）結成の次に、松声会をあげている。ひとつの証左になる。いずれにしても松声会の結成が、信州ではむろん、全国でも古く、二十九年春ということになると、松風会について二番目、三十年春でも、五番目となる。

## (二) 新派と旧派

松声会は奇峰が起こし、三川によりその存在が知悉されるようになる。しだいに三川の影響が広まり、松声会に刺激されて、いくつかの同好会が出来る。

管見では三十五年末までに来た県内の新派結社グループは他に、次のものがある。

秀声会	東信	新声会	北信	若葉会	暮雲会	飯田松声会	昼寝会	一声会	臥竜会	二葉会	鵝社	交阿会	南信	茶の花会	庄詠会	庚子会	若葉会	中信
(小泉東内村 31・12)		(更級牧郷村 32・5)	(長野 32・3)	(飯田 34・10)	(高遠 34・10)	(上伊朝日村 34・7)	(竜丘村 32・8)	(飯田 31・2)	(諏南 32・9)	(上諏訪 32・8)	(諏訪山浦 32・8)	(諏訪高島 31・9)	(諏訪 30・5)	(諏訪 30・10)	(今井村 35・8)	(明盛村 34・11)	(梓村 34・8)	(片丘村 34・1)

これは、三十九年頃までになると、

中信16、南信21、北信25

と、東信を除き、全県にわたり陸続と結成されると、なぜ東信に出来ないのか、今のところ私の謎であるが、その数は七十近くにもなり日本俳句は、小学校教員層を中心に信州にひとつの拠点をつくるのである。

私は日本俳句人による写生文の運動やこの俳句活動を、大正期の信州白樺運動をすすめる教員層の一世代前の覚醒運動として重要視している。この点については、後節で三川の教育者としての一面に触れながら、あわせて農村の生活改良家の相貌を語りたくと考えている。

信州が日本俳句運動の拠点となる、ひとつの統計を示したい。「ほととぎす」二巻12号(明治32・9)の募集俳句投句家各地分附表の全国県別統計である。

これを見ても、東京、大阪について、信濃の俳人が多いことがわかる。伊予と比べても、断然多い。

ほととぎす募集俳句投句家各地分附表(数字は人数を示す。)

東京	大阪	京都	山城
67	37	7	3
大和	和泉	摂津	尾張
1	1	9	5
三河	遠江	駿河	甲斐
4	13	4	1
伊豆	相模	武蔵	上総
4	3	21	1

陸前	岩代	磐城	下野	上野	信濃	美濃	近江	常陸	陸奥
5	3	4	7	7	28	10	4	10	7
因幡	但馬	丹後	越後	越中	加賀	越前	羽後	羽前	陸奥
5	2	1	11	11	5	2	6	3	5
讚岐	紀伊	長門	安芸	備後	備前	備中	播磨	石見	出雲
1	3	1	4	3	5	1	5	2	14
清国	台湾	北海道	日向	肥後	豊後	筑後	筑前	土佐	伊予
1	1	6	1	3	3	1	1	4	18

さて、これだけを知ると、新派俳句は、かなりの力を県下の俳句界にもったような錯覚に陥るのである。ところが、なかなかそうはいかなかったようだ。

では旧派の実態はどうであつたらうか。今度は旧派の一つの資料を示したい。

明治三十年十月二十三日、松本で上梓された「信濃明治俳家集」上下二冊である。芭蕉翁肖像を掲げ、神道権大教正、月之本素水の序文、菱月舎井口翠湖編輯、叢月舎金丸対山校閲といういかめしい旧派の句集である。

発句を四季別に出し、さらに歌仙を一巻、半歌仙を一巻収めている。

ここには何人の俳人が句を寄せているか、「春の部」だけを見よう。巻頭は、

初虹の消えて残すやささ濁り

金丸 対山

見る我に動いて見する柳哉  
慕はしやまだ見ぬ花のよし野山  
井口 翠湖  
小松 松雨  
といった句で、俳人数は、こうである。

郡名	人数	郡名	人数
東筑摩松本町、松本村 西筑摩 北安曇 上伊那 北佐久 更級 上高井 上水内	92 25 113 211 56 12 24 34	東筑摩松本以外 南安曇 諏訪 南佐久 小県 埴科 下高井	501 181 293 34 76 20 16

これは月の本系の一俳書にすぎないが、総計で一六八八人という途方もない数になる。

むしろ、俳句が「美術文学の一種」であるからには、俳人の数の上での多寡は問題ではない。が、地方にあつて、新派の俳句を拡めようとするならば、早晩、これだけの数の旧派の俳人を向うにまわし、一戦を交えることにもなりかねないのである。

三川・扶揺論争

三川にとり、その折は、明治三十四年一、二月「信濃日報」紙上



での論争として到来した。以下、そのもようを記し、三川の俳句観の一面を明らかにしようと思う。

「信濃日報」は、明治二七年九月から昭和十五年六月まで、松本を中心に出版される四頁大の日刊紙で、発行部数は明治三十年代で二十五万と言われる。松本地方最大の新聞である。

三川は帰松後、三十二年から選者として常時係わりを持ち、松声会報「松声会小集」を掲げている。しかし日報の俳句は新派ばかりでなく、時には、旧派の歌仙や京都花本聴秋宗匠撰、京都止心庵秋村宗匠撰、肥前秋眺庵一朗宗匠名所附、松本洋々舎帆来撰三ツ折などが載る。

ことは、前年十一月に、新春発表の「発句募集」をし、「新派と言はず、旧派と言はず続々投稿あらんこと」を望んだのである。句題は、落葉、寒菊、雪、家(冬季結)、新年雑詠。句数自由。

この募集俳句は、応募者百十三人、句数千七百二十三句。選をしてみると一句も撰られなかった者過半数であったと言う。

三川は元旦と九日、あと一日(この記事不明)紙上に「募集俳句に就きて」を書いた。ここでは、募集俳句のことよりも、芭蕉や蓼太の喧伝されている句をあげて、ずばり、その無価値を評したのである。たとえば、

物言へば唇寒し秋の風

やがて死ぬけしきは見えず蟬の声

芭蕉

古池や蛙飛び込む水の音

むつとして帰れば門の柳かな

にくしとて叩くにあらず雪の竹

牛馬も動かす蠅の力かな

蓼太

こんな句を挙げて、次のように論じた。

「素人は矢張成程実(うま)に甘いと感ずるであらう。だが是等も文学上俳句としての直打(ねうち)の無いことは、勿論である。文学的趣味を解せぬ局外の人に、名吟として持囃(もては)されて居る様な句は、大抵は下らないものが多く、勿論、彼の「古池や」の句の様に、意味も分らず只無暗に有がたく思つて居るのは別である。」

三川は、日本派にあつては、ごく常識だと思つるところを書いたのであつたが、二月に入り、旧派の鳥羽扶揺という一俳人からの反論「子が俳句を尊重する所以」が二日にわたり載つた。

三川が「新派旧派の限界をたつて旧派を罵倒し、傍若無人の論を試みて、俳句を以て一の娯楽に過ぎずと盲断」したので、「欺道の為め一言の解(か)なき能はず」というわけである。扶揺は、まず「俳句は帝国の大文学なり」と小題を掲げ、俳句が漢詩和歌詩文と同じく高尚なものだとして、「四時の風光千状万態変化(ま)窮(つ)なきの状、世態の起伏、人事の得喪(とくそう)をも能く片言双語に幽情を寄せ、送思を寓し、人をして大に感動せしむる」ものは、俳句より他になく、三川の頻りに言う「文学的趣味」は、この点にしかない。

そのために、自然、事物の觀察を精細にし、「てにをは」の用法字句の配置に留意する。そして、一二句の佳吟を得るために「古来の学者が終生の理想」をここに集注したのである。

ところが「僅かに十七文字を並る事を習ふた位の輩が芭蕉翁の古池やの意味が斯々だの解せぬのと批評するは大きな誤りであり」近眼者の「浅慮」だと書いて、次に「妙句」古池の句解を施している。それは、当時の旧派俳人（正風俳諧教舎）の「見事」な「解釈」なので、長文にわたるが引用したい。

「時は茲に古池あり。古池は界限に於ける郷党富豪とも称すべき者の賞玩の爲め設けたるものにして、其当時は源泉太く飛瀑によりて之れに注ぎ、池水の新陳代謝中に鯉魚游泳し、池辺には奇岩聳へ杜若菖蒲の水に泳するあり。庭内は一日も間断なく掃除するを以て雑草の生ずるなく、落葉の散乱するなく塵埃の認むべきなし。主人は日毎盆栽心を傾け、或は池辺の風致を詠し、時に酒宴を張りて豪歌浩飲を極めしも、栄枯盛衰は世の習ひとて、時移り世易り、此の豪家も何時しか破産の悲境に沈淪し、主従の双影を見ることなく源泉は埋もれて水の通路なく池水は爲めに腐敗して鯉魚の躍るなし。腐肉を掃除する者なければ、雑草繁り、落葉推積し、満目荒涼人の此処に遊ぶものなし。吾れ独り悟道に志し、好んで斯る古跡を尋ね来り見れば、蛙の我足音に驚て水に飛込を見るのみ。知るべし社会の転々として盛衰常なく事物に浮沈あることを、嘗て俗人を喜しめし榮華の風景は今や一変して寂寞たる

自然に帰り、吾をして湛然逍遙の域に遊しむと嗚呼」（信濃日報・明治43・2・3）

次に、「俳諧は国教の一なり」として、

「俳諧は孔孟の教に順ふの国教なり。俳諧は仏果を得るの悟道なり。俳句は人倫五常を心に治め、花に吟じ月に嘯き以て、文化の開明を育するにあり。若しこの心なく五常を猥す時は、何程名句名吟たりとも真の俳諧俳句とは言はざるなり」

「俳諧を広るは、世教人道に裨益せんとする」「俳句は人情を探り、自然を究め、倫理に叶ひ、道義を重ずるの趣向なかる可らず」と言っている。

これは、三川が俳句は詩歌の一部なので、裏面に意味を持たせて、人を教えたり、戒めたり、世を諷したり、世教に益するなどと考えるのは誤りだと述べたのに対する反論で、ついには、三川の教育者としての立場を非難するに至っている。「君の如く身教育界に重きを置くの士にして、尚此の如し。近来世道人心の頹敗せる故なきに非ず」

さらに「新派なく又旧派なし」の一節では、三川の選句と扶搖が「類同」と考える句を掲げて、新派こそ「陳腐」だとしている。

前者が三川選の句。

餅搗を隣の家に頼みけり  
餅を搗く家で聞けり夜の道

初雪のいささか白し物の上  
初雪や物の上にも化粧ほど

この三川の選句は、扶搖とは観点が違う新派の立場から見ても、陳腐なのは免れがたい。

扶搖は三川ら新派を、「之は子規風、之は鉄幹調、之は蕪村体など言いはやし、形のみやかましく云ふて其思想を新しくするの手腕もなく、陳腐中の陳腐なるものを得て、斬新となし、急所を見るの能力」なき者だとし、新派に「定義」を下して、

「勿論の名句」を「無味只言なり」として排斥する者だと論断している。

また「理屈とは何ぞや」という一節では、理屈と道理とは異なり、「物いへば」のごときは、一言のもとに「倫理を教へ風趣を含む名吟」で、もしこれを理屈と言ったら、「天下の名文一として理屈ならざる者あらんや」と書く。

以上は、扶搖に代表される旧派の説をすこしくわしく掲げた。これによって三川ら日本派が旧来の俳人の眼にどう映ったかを、もう一度、主要な点をまとめてみると、

一、徒らに珍奇を衒<sup>せ</sup>み語調を整へ、形のみやかましく言って、その思想を新しくしていない。

一、句を評するのに無味只言なりを常套にしている。

一、理屈と道理の区別を弁えていない。

一、時代とともに推移すべき理想をもたず、古人の糟粕を嘗め、古句を盗むものである。

となる。これらは、多く見当違いの批判であるが、中に子規によって代表される日本派の口吻や一面を衝いている点もある。

子規らの論が、「新俳句」に代表される初期において、一句の内実や味わいよりも、用語や句形にのみ偏していたこと。元禄、芭蕉を批判し、天明、蕪村を讃仰しながらも、俳句詩型の本来の根本的考察に欠け、俳句の将来に対する展望を一切もっていないなかったこと。子規は、俳句は明治年間で亡びるのだという例の錯<sup>バリエーション</sup>列法による自説をもっていたことで、この点は一層欠けていたといえよう。

後に碧梧桐によって、「新俳句」時代の新しさが「新題を加へる運動も、又それに連関する定型の破壊も、思想的な根拠と俳詩成立の根本的考察の背景を欠いてゐたため、ただ一時の遊戯として、烟散霧消してしまった。」(「子規の回想」と内部からも批判される。

碧梧桐の考えとは、次元が異なるけれども、旧派の一俳人扶搖の指摘も、三川ら日本派が地方に理解されていく上で、必要な批判であったといえる。

鳥羽扶搖の立場は、明治十八年松本にできた正風俳諧教会<sup>(26)</sup>という、神道に則った旧派俳人集団の考え方である。明治政府が「祭政一致の実現とキリスト教排斥<sup>(27)</sup>」の意図から俳諧関係者の中に教導職を任命し、三森幹雄、鈴木月彦、月の本為山ら旧派を、その任にあ

たらせている。扶搖は、月の本系「教林盟社」の俳句運動をすすめる一派の無名田舎俳人であったので、まことに素朴に、

一、祖翁の本旨を会得して天下の人の規に恥ざらん事を心掛る事  
一、名利名聞に泥みて俳道を忘るゝ事を思ふべき事

一、一時の戯れに乗じて俳諧の正風を失はむとするを恐るべき事  
一、俳諧とは行住坐臥人の行ふべき事を行ふを云ふ、行ふまじき事と為るは俳諧にあらずと心得べき事

一、色欲は人情の然らしむるものなり、尤も注意すべく人道にたがいて過ち有るべからず、屹度省我慎独の戒め自得あるべき事  
という規約に準拠して、三川に反論したものとみえる。

因にこの教会は会長が金丸対山<sup>(28)</sup>、信徒会員は千五百。信濃各地に分教会(支部)をもち、盛んに句会を開いて、「敬神愛国の旨を体すべき事」、「天理人道を明かにすべき事」、「皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむべき事」の倫常道を句作を通して実践していたのである。

このような扶搖の論難に三川は早速反論し、「鳥羽扶搖君に答ふ」を、次の各節に分けて書く。

一、新派旧派といふことに就きて

二、古池やの句に就きて

三、詩歌の目的に就きて

四、拙作及び選句に就きて

五、理屈と道理といふことに就きて

この一文はきわめてわかりやすく、扶搖の大上段に構えた文章と

対照的である。

一、仮りに便宜上分けたのみで、俳句には新派も旧派もなく、上手下手があるだけ。

二、古池の句は名作でないことは明治俳壇の定論である。<sup>(29)</sup>人口に膾炙していることと名吟とは別。扶搖のような解釈は、田夫野人を感服させても、少し文学を知る者には盲が物の色を語る類。

三、詩歌は絵画彫刻音楽舞踏建築などと同じく美術に属するものだから、人の心を楽しませるもの。教訓したり知識を与えたりするものではない。孔孟の教云々はまことに「迷夢」甚しいもの。

四、先に掲げた両句の比較は、趣向が全然違い比較できない。「物の上にも化粧ほど」の句、これが旧派の表現の厭味の見本。俳句はたとえ趣向は新しくなくとも言い現わし方次第で、価値ある句となるもの。

五、理屈と道理とは元より同じこと。  
と書き、終りに自分の心情を吐露して、

「如何にも僕が得々として居る様に書かれてあるが、僕は得々として居る積りは毛頭ない」「僕は君の何人なるやを知らないが、君は僕の何者なるかを知らるる様である。松本の近辺の方ならば序に訪づれ玉へ」

と、懇ろである。このような論争においても、自己の立場を絶対化しないで、つねに相手の意見に傾聴して、己をかえりみる態度は、三川の終生かわらない謙虚なところである。そこが多くの門人教え

子に敬慕された所以の一端でもある。

翌年書く文章でも、「世間には新派が解った様な積りで無暗に奇妙な句を並べ立てて嬉しがって居るものが頗る多い。地方の新聞には斯る奇妙な句が沢山見受けられるが、之を見る人も矢張り解らない人が多いのである。恥づかしいことには自分も矢張り解らないのである」(句さく・長野新聞35・12・5)と述べている。

扶搖は、三日後さらにつづけて、三川の意見、甚だ不明答なので重ねて所説の誤謬を申し上げるとして一文を出している。

ここでは、自説の繰返しであるが、三川の論が、文学趣味を解する当時のインテリの中に良質の理解者を期待するといった、新派俳人としての矜持が感じられた点を衝いている。

扶搖は、俳句の特徴を「勤勉素直なる田夫野人の好侶となり師友」となるものと説き、また俳句が他の詩歌とは違い、「詩歌の如く六ヶ敷なくて、半言双語の中に能く無尽の趣味を寓して人心を感動せしむるにある故に字句の配置や語音の調合を用ひ、裏面に道理を含めて諷したり教へたり或は謎をかけたたり粧ふたりする」ものだと論じる。

裏面云々は扶搖流であるが、俳句の独自性を素朴に考えようとしている点、三川らの、俳句と美術とをまつたく区別なしとする「詩は絵のごとく」<sup>(30)</sup>といった見方を、奇妙な角度からわずかに破っているところがある。

二人の論争はこれで終止符かと思われたが、さらに両成敗のよう

な形で、北水楼主人の「三川氏と扶搖との俳論を読みて」(2・16) 伊川庵主人の「扶搖と三川」(2・17)が出たのである。

両文とも、格別な新味に乏しいものであるが、互の議論の土俵を定めよと言う北水楼主人の論の核心はこうである。

「第一に詩といふものはどんなものであるかといふこと、第二に道義は果して美の要素であるかどうかといふことを極めないからして論が互に二十三代半位な傾を以て背反する」のだといい、詩は想と語と調とが要素であり、純美の中に道義の要素は入らない。すると、三川の論がもっともだと三川の立場を首肯している。

伊川庵主人の方は、両者に皮肉たつぷりの語り口で、これは議論などというものでなく「小ゼリ合ひ」だ、三川も選句の言訳をするなど見識のない男で、「己の拙を蔽ふ為めに古人の句」を貶めたのかと難じている。しかし、これは三川擁護の芝居をうったものかと思われる。それは、次のような書き方をしているからだ。この一文はなかなかおもしろい。

「彼程のエラがりでは実に扶搖が云ふ所の奇を售るに陥るのである。而も彼れは僅かに新俳壇の斉唱の罵倒を切り抜いて敵に当るの鎧楯とせる哀れサ、彼れが求むるの活路は彼れを誘ふの陥穽にして、所詮は扶搖の如き狂癖者(俳狂?)に掲げ足を取らすものか、口惜し。」

そして、三川の自句「酔うて戻る雪の夜道や小便す」をとりあげ、

「彼れを陳腐と云ひ、是れを詩趣と云ふ杯は誤まった話で、チヨツ(チヨツ)醉漢野雪の小便を詩味津々ナンカンと思ふて居ては没美の骨頂。画に写生を重んずるの類で、新派先生と云ふの外は無い。」と高飛車に出て茶化している。が、要は三川弁護であり、伊川庵主人は、松声会グループのひとりか、その周辺の者が書いたものではないかと推測される。

この論争は、三川が日本派俳句を地方に伝播させようとする途上で、行き当った、まさに小ぜり合いであるが、明治三十年代の信州俳壇を考えると、当然起るべくして起ったものと言える。

これより五年後、三十九年に長野新聞紙上で、当時の主要な県内の日本派俳人、宮林董哉、胡桃沢四沢、岩本木外、平林岐水、北村春畦、臥牛山人らと交わされる糸瓜忌論争(31)と比べると、おもしろさの点で質的に見おとりするのはやむを得なかった。

論者が新旧に分れて、論点が噛み合わない上に、相手が見識の乏しい旧派の俳人だったので、三川が慰諭して手加減を加えているところが見えるためでもあった。

### 〈註〉

#### 一、日本派俳句との出会い

- 1 日露戦争の時局多端に際し、三十七年度は教育費の三割削減をするために、代用教員を解免した。その結果小学校では教員不足となり、二級を一教員が担当したりして授業運営が満足にできず、児童は五日十日と竹棒石片をもち運動場を縦走横行し、貴重な時間を消費するのみという状況の学校もでた。(松本小学校)そこで、時の郡視学白井

毅に補欠教員の任命を迫ったらしい。ところが白井は郡下の補欠教員を同時に任命するといって言を左右し、なかなか速かに上申をせず、それがため授業に支障をきたす学校が多かった。三川の島内でも同様で、全教員十二名中、代用教員が六名。とりわけ望月直弥の解免が問題であった。直弥は代用教員としては、破格の、二拾円、という高給をもらっていた。三川が三拾円、首席訓導の間宮長宗が二拾円、代教は、訓導の半額位が普通。生徒に信頼が厚く、クリスチャンとして人間教育に全力を尽くす直弥を、三川は最も信任し、高給を与えていたものと思われる。代教の解免で、白井毅とはげしく意見の衝突があったもよう。結局、三川も直弥もともにこの時退職している。直弥ばかりでなく、三川時代の教員は、三十七年にはほとんどいなくなってしまう。島内小では一年間仮校長を置き、教員不足校長不在のままになっている。

白井は山口県玖珂郡今津村出身の士族で、東京師範を卒え、明治十七年に長野県へ来て、南安の督業や師範訓導、さらに更級郡視学を経て、県下で学校数最大の東筑の視学になる。当時の「信濃日報」には「奇怪なる教育界」(社説)とか「無能なる郡視学」といった明らかに白井批判の記事が見える。三川退職事情なども一因で、当地方教育界に紛糾があった。白井自身も、三十七年十一月十二日、文官分限令に依り、休職を命ぜられ、長野県を去っている。従来、三川を罷免させる事務処理は、白井の後任の視学湯本政治がやっているとの説があるが、これはあやまり。三川退職七か月後に白井がやめているからである。この問題は、第五節教育者としての一面で述べる。

- 2 四月十八日付の子規書簡の宛名は、まだ北里であるが、五月三日には島内小の訓導に任命されているので、四月下旬帰松と推定される。

- 3 奇峰自筆を胡桃沢四沢(勘内)らが手を入れたもので、記事はほぼ正確である。

- 4 矢ヶ崎奇峰「上原三川のことども」(信濃教育、昭和3年1月4日号)
- 5 「八千溪俗名飯島魁、飯島村の人。久しく長野小学校に教鞭を取りしが、明治三十五年十月卅一日肺を病みて死す、享年三十四」(三川)
- 6 日本派の名称は岡野知十の「俳諧風聞記」を草した頃から始まったという。(白雲説)
- 7 「三川句集」(三川上原良三郎先生懷徳会・昭和13年10月5日発行)によると島内小学校へ赴任した時の句となっているが、明治二十九年に「日本」に載る以上あやまりであらう。三川赴任は三十年五月三日。
- 8 子規訪問の記事を三川自身「信濃日報」へ掲げた由。未見。(山田貞光氏ご教示)
- 二、月次十句集における三川
- 9 「東京俳句界注意」十句集の課題及幹事を定むる事は、従来子規之に当りしも其病苦これさへも堪へ難きに至りたれば、今後は碧梧桐代りて之に任ずべし。故に今後の巻はもとより、従来のものにても未だ本誌東京俳句界中に出でざるものは仮令碧梧桐出句せざるものも、一応同人の許に回送すべし。ほととぎす四巻4号(明治34年1月)
- 10 道灌山で虚子と別れた翌日、飄亭宛の長文の手紙の最後の一節。29・5・26 虚子宛の手紙にも出る。
- 11 「これ迄捨てて取らざりし人事を好んで材料と為すの異観を呈せり」と書くのは「春夏秋冬」(春)の序であるが、三十年末すでにこの傾向が出る。
- 12 松井利彦「近代俳論史」(桜楓社) P 96
- 三、「新俳句」編輯の内情
- 13 池上浩山人「子規全集第十六巻」(俳句選集) 解題 P 638
- 14 住山久二「四沢先生の昔話聞書」(松本時論昭和11年7月15日)。三川から四沢が聞いたことがらを語ったもの。
- 15 「明治32年の俳句界附記俳社一覽表抄」(ほととぎす三巻4号)
- 16 先掲、住山久二の一文。「碧玲瓏の話」
- 17 明治三十年十一月二十日碧玲瓏宛子規書簡に「扱三川君よりの来状によれば俳句集の事、貴兄と楽天君に一任せりととの報有之。著々出版の運びに到居候ことと被存候」とある。これは編輯一切を三川がやり、民友社との出版関係の事務を楽天に依頼したものと推測される。
- 18 碧梧桐「子規の回想」続編第五章  
「愈々句集実現となつて、筑波会や秋声会派の句も併録するとの消息は、落第生を駆つて、侃々諤々の議論を放射せしめた。子規の三川宛の手紙に、体よく紅葉、小波等の句を省くように観めてゐるのは、其の侃々諤々論の余響でもあった。」とある。
- 19 三川息、寅太郎が昭和22年6月29日三川の四十年忌に中信俳句大会で「上原三川のこと」と題した講演をした。講演草稿をさらに補促した文中に出づ。
- 20 「昆虫世界」に明治37年1月より昆虫文学欄がもうけられ、昆虫に関する漢詩、和歌、俳句が載ることになる。三川は松藻虫懸賞募集句に当選。以後37年7月より40年6月まで昆虫俳句の選者として活躍。四沢や歌朗の投句が多い。自句も74句掲載。
- 21 松岡満夫「新俳句」の成立と特色(国語と国文学三四〇号、昭和27年8月) P 37
- 22 太田鴻村著「明治俳句史論」(交蘭社) P 21
- 四、旧派との論争
- 23 三川は南安曇郡梓川村花見の萩原弥曾次、その次男。兄君十、弟益一。男三人とも事情により母方の実家川船に入籍し、川船相重(愛十)、さ江を父母とした。男子がなかったので、君十が嗣子となる。三川は、明治十九年二十一才のときに、東筑和田村殿区上原肇次(當時豊科警察署長)の養嗣子となる。肇次長女たと結婚するがた二

- 十一年五月に死去。すぐにたの妹あさと婚姻。寅太郎、友彦、そのを生す。友彦九才で死亡。三川の妻あさは、三川婦松の翌年三十一年八月十九日二十六才で、双生女児出産が難産となり死去。双生児も間もなく夭折。三川の身辺に死の影が累々と積む思いがする。
- 24 対山、梅谷、帆来、雨柳、翠湖、喜鶴の歌仙、「観月会」表六句（明治32・9・23）、裏六句（9・29）が載る。
- 25 明治33・10・4秋季十句、11・9露に足、11・10クカツ上下折句。たとえば秋季十句中の天、地、人はこんな句である。
- 天 秋みちて古びぬ月の光哉 撰津楓蔭  
地 月夜にも虫啼闇は残りけり 筑前雪水  
人 初秋の空のしまりや星の色 信濃紫花
- 26 教会長は純神職者加藤事松、次席の会長は俳人側金丸対山。教会場は松本神道事務局内に置いた。
- 27 松井利彦「近代俳論史」P 30
- 28 日報（34・1・25）には悼金丸対山宗匠の記事が載る。筆者恋川舟町。対山は、一月七日死亡。
- 29 子規の「芭蕉雑談」に悪句の代表として掲げられる。古池一句について論じた文が子規にはいくつもある。
- 30 絵画における表現と文学における表現とは本質に違うものだというレッシングの「ラオコオン」で論じられるような問題意識が子規にはなかった。ゲーテの「詩と真実」第二部レッシングとの思い出の中に引かれるホラティウスの「詩は絵の如く」という、この考え方が、まとも信じられていた。
- 尚「ラオコオン」序文に引かれている「絵は無声の詩、詩は有声の絵」というシモニデスの言葉が、徳富蘇峰の「新俳句」評の終りに、このようにして出される。「新俳句」は「滄海遺珠多く有之候。因に申上候、為山氏の画、逸趣横溢、真に俳画の妙品と存候。別言すれば、画

即ち俳句に候、所謂無音の俳句に候」（傍点―宮坂）  
わが国において絵画表現と文学表現の本質的違いに気付くのは、まだ先のことである。

31 「糸瓜忌」という一熟語を「糸瓜の忌」と「の」を入れて表現することが可能なりや、「猿股」を猿の股、「兵児帯」を兵児の帯というだろうかといった三川の卑近な問題提起から端を発し、俳句固有の表現について論争が行なわれた。この点に関しては、節を改めて、詳述する。

。この稿を草するにあたり、多くの方にお世話になった。とりわけ次の方々には資料を借用したり、聞き書きをさせていただいたりした。お名前を記して深謝したい。

東明雅、千原勝美、胡桃沢友男、上原欣治、山田貞光、小原元亨、岩崎睦夫、川船秀人、萩原太郎、伴野敬一、京谷千鶴、信濃教育会、島内小学校、塩尻市片丘支所、松本市島内支所